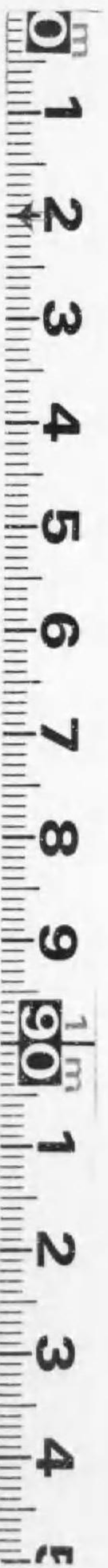


517

573



始



真山青果著

五人女



南宋書院

大正
15.12.7
內交

(1)

人ありて若しわたしに、三十年間机邊をはなれぬ愛讀の書を問はず、わたしは直ちに井原西鶴翁の著作をその一つに加ふるに躊躇しない。彼翁の人生及び社會に對する觀察と批評とは、常に鋭敏に、常に新鮮に、自由に、拘泥なく、凝着なくして、われ等後生輩の遲鈍を鞭扑してやまない。この「五人女」は今より殆んど二十年の昔、彼翁の作品を讚美渴仰するのあまり、多少なりとも原作の面目を現代に髣髴たらしめんとして、試に意譯の筆を起

して新篇をなしたのである。今改版に際して把
つて讀むに、語句文章等の上に幾分の改竄を加ふ
べき點がないでもないが、然し大體に於てはその
必要を認めないと思ふ。そのまゝ、印刷に附した
所以である。

大正十二年十二月

著者識

内 容

樽やおせん……………	一
八百屋お七……………	三
お夏清十郎……………	八
おさん茂右衛門……………	一三
おまん源五兵衛……………	一五

装 幀 小松榮氏



おき
法十郎

哥
麻子
筆



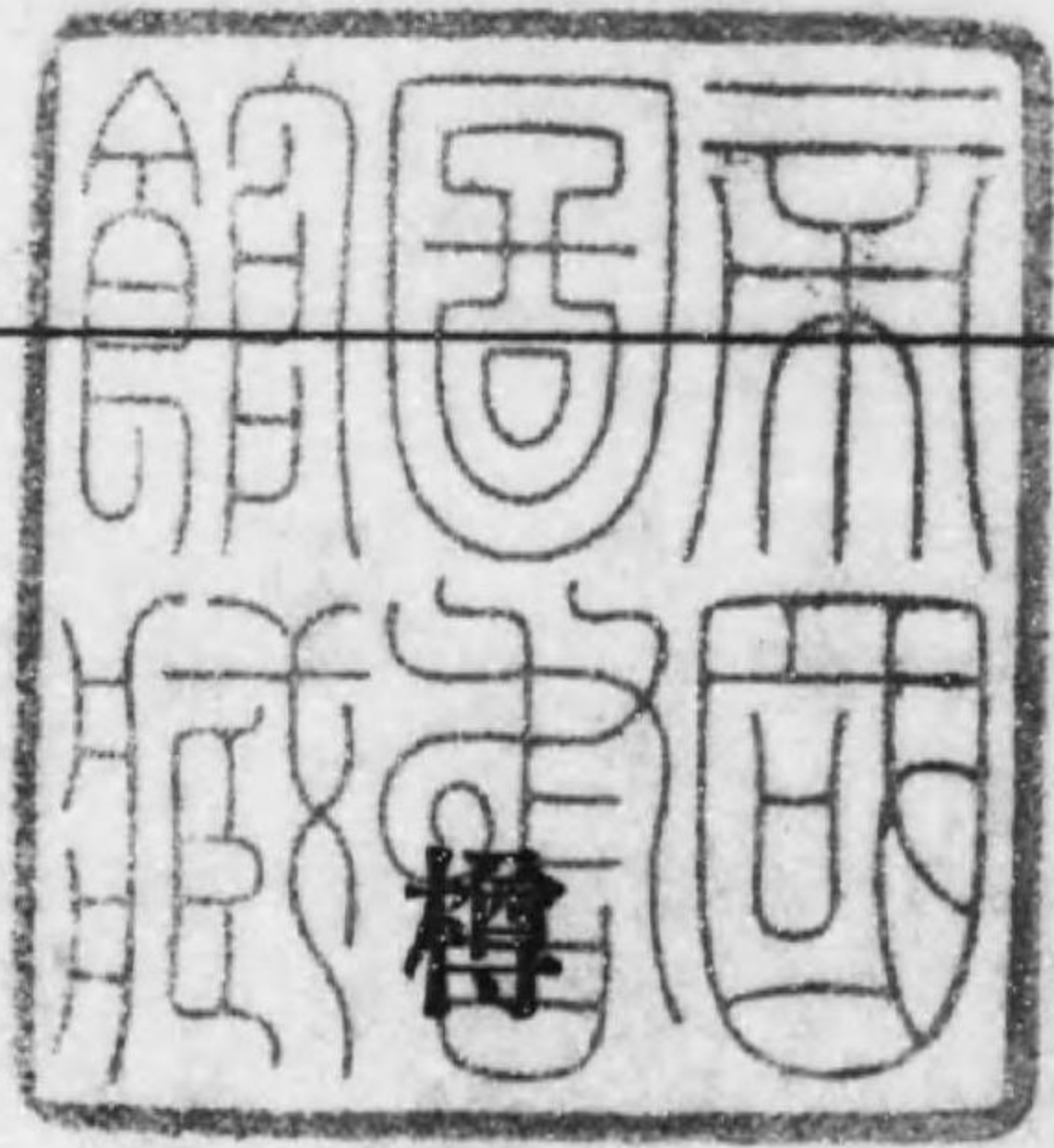




五

人

女



屋

お

せ

ん

大阪は北、天満に借り店して暮す男があつた。職業は樽屋。女房も無い獨り者には珍らしくも、律義一圓なその日／＼を送つて居た。

女は耳の根白く、足も土離れして、田舎そだちには勝れた容色であつた。十四の年の暮、年貢金に差迫つた親々の難儀を救ふべく、こゝに或る棟高い町屋へ腰元づとめすることゝなつた。

それから續いて奉公して居るうち、生來の伶俐と負け嫌ひな性分が自然務めにもあらはれて、奥々の隠居の取あつかひ

方から、氣むつかしい奥様の機嫌も好く飲込み、今ではこの家に無くてならないおせんとなつた。陰口のうるさい下々の奉公人にも好くあたつて、内藏の出入りさへ安心して任せられるやうになつた。

その上、若いには珍らしく身持が固くて、これまで一度浮いた噂を立てられたこともない。たまに冗談でも云ひ掛ける者があると、顔色を變へて開き直り、誰の手前であらうとビシ／＼遣り込めるので、店の若者どもゝおせん一人には恐れをなして近寄らぬやうにして居た。中には又その高慢さうな鼻先を憎くさうに譏しるものもあつた。

秋初めの七日の日。

赤々とした秋日はくるめきながら物の表面を明るく射し付けた。竈役にかゝつた横町うら長屋の借家人どもは、總井戸に使ふ蓋なしの外井戸に寄り集つて、今日七日夕前の水換へにいそがしかつた。

濁水をあらかた吐出して、泥砂が釣瓶に上つて来るやうになると、中から色々なものが混つて出た。いつぞや大騒ぎして人疑ひかけた薄及庵丁も出た。禁厭に使ふと云ふ駒引き鏡、目鼻の溶けた裸人形、くだり手のかたし目貫、つぎはぎの涎掛け、そんなものが外にもいろ／＼上つて出た。

涌口も近くなつた。いま一息と云ふ時、腐れかけた根輪の合釘が離れてバラ／＼に潰れてしまつた。そこで、急に樽屋

を呼んで、根皮を新しく埋けることゝなつた。

竹竿に掛け通した白地の乾し物が秋日に白々と乾いて、尻尾の赤かい蜻蛉がそれへ停つては、又ツイと飛んで行く。樽屋は日和に胡坐かいて縊を輪組みながら見て居ると、かれこれ瑞齒も芽みさうな萎びた女年寄が水溜りに跼んで、何やら生物を切りと弄りくねつて居る。

「媼さん、何だね、それは。」

「これかね、なにさ今井戸の中から蝶鯨が一匹上がったのだよ。」

「何うするんだね、それを。」

「別に何うすると云ふんぢやないが、考へて見ると、これも

不思議な蟲さね。」

年寄は眼を見せて、穢なく日に焦けた顔を向けて笑つて居る。そして、この蟲を竹筒にこめて黒焼きにして、その粉をソツと思ふ女の髪にふりかけると、思ふ女の方から心が動いて來ると云ふ不思議な效驗を話して聞かせた。

この老婆はもと夫婦池のこさんと云はれて、産婆の傍ら分別ない男女の頼みのまゝに、恐ろしい罪を職業にした女であつた。その後、その筋の法度が厳しくなつてからは、そんな酷い仕事も出來ず、今は素麵白なぞ碾いてその日をかすかに送つて居るのである。年寄は話し出した愚痴話をダラ／＼とつゞけて、先きに望みの無い、今の悲しい身の上を話して聞

かせた。でも、樽屋は格別その話に引かれる模様は無い。仕事する手を忘れ、根掘り葉掘りして、前の蝶蠅の話ばかりを聞き整つて居た。

その様子が唯事と見えない。年寄もツイその熱心に巻き込まれて、その思ふ相手の名を根問ひして聞いたが、初めのうちは樽屋も笑つて居て容易に明さなかつた。他へは洩さないと言言して達つて聞くと、樽屋もそれでもとは云はれなくなつた。

「なアに、その女は遠くぢやない、ツイ目の先に居るのだよ。」とまで話の緒口を切つて了つた。
「目の先きだつて、お前さん。」

「おせんだアな、こゝに奉公してゐる。」と家主の臺所を隠して、
 「何しろ、これまでだつて何度手紙を書いたか知れない。それを、唯の一度だつて振り向いてもくれないんだ。」と調子
 付いた樽屋は、ツイ涙ぐんでその今日までの苦しい胸の中を
 明かして聞かせた。

すると、その年寄が云ふには、おせんだのか、それなら何
 も蝶も入らない。私にまかせて置けば、屹度近々のうちに
 埒を明けて見せると、面白づくから出て然も事も無げに云ふ。
 樽屋も半信半疑ではあるが、その口振りを聞けば又満更の悪
 戯言とも思はれない所があつた。

「本當かね、媼さん。本當なら恩に着る。だが、俺等も職人

だ。金銭の然うかゝる事なら思つたつて出来ないが、正月に
 染木綿、盆に奈良晒しの中ぐらゐなとこのお禮は屹度する。
 それぐらゐな事で済むなら、媼さん、全く俺ア恩に着るよ。」
 「厭なこと。私ア何も欲得づくに頼まれてこんなことするん
 ぢや無い。まア黙つて見てお出で、それにア又私の仕掛けが
 あるんだから。自慢ぢやないが、これでも私ア今まで何百人
 と云ふ肝煎をして居るんだ。私が仲へ入つて續けた話に一つ
 だつて出来ない例は無いだよ。嘘なら誰にでも聞いて御覽。
 さうさね、まア菊の節句まで待つんだね。その前にや屹度好
 い返事を聞かせて上げるに好いだらうと思ふよ。」
 と云つて、洗ひ晒しの帷子の膝に手がかつて、皺面をたる

ませながら得意さうに立ち上つた。
 「本當だね、媼さん。好いとも、若しこれが出來たら媼さんの達者なうちア、俺ア一代小使ぐらゐに不自由はさせない。」
 樽屋はもう上の空に氣を取り上げさせて居た。

二

孟蘭盆も過ぎて二十八日となつた。
 軒端につるした燈籠の油もたつた。冷々とした肌に滲みる秋らしい夜の風が闇を白く吹いて流れた。最う今日明日となつた踊りを、思ひ切り悪く騒ぎ踊つて居た若い人たちも、夜露に着物をシットリさして銘々の家へ退いてしまふ。町は

遠くへく、穿物の音が切れて行つた。

片戸下したこの家の店の門口を險しく開け放して、一人の女が息を切らして駆け込んだ。何時か、かの樽屋と話し合つて居た老婆であつた。座敷の中に倒れて、

「苦しい、水、水。」と顫へ聲に頼んで居る。皆が寄つて集つて介抱すると、兎に角正氣には就いた。

「まア、何うしたとお言ひなのだ。何んぞ恐しいものでも御覽か。」と奥の隠居や内儀も、物音に驚いて奥から出て來た。

年寄は面目なさうに、しなびた手で着物の前なぞ掻き合はせて居たが、「いゝえ、全くお話にもならないので御座います、好い年をして年寄の癖に、夜歩るきなぞ致しますからこ

んな目にも會ひます。宵から寝せるのも勿體ないと存じまして、鍋島様お屋敷前の踊りを見物に参つたのです。」と唾を唇に溜めて口數多く今夜の概略を語つて居る。

「然う思ひましたよ。盆も正月も若い時の事で御座いますよ。京の音頭道念仁兵衛だ、山くどき、松づくしだと申したところで、トンと役體もないこと。ザンザホヤ云つて喜んで居る若い人達の氣が知れませんか。それに夜風は滲みる。トボく歸つてお宅の前まで参りますと、二十四五にもなりませうか美男な男、私にとりつき、つれない戀に責められて今思ひ死に死ぬところぢや。憎いはおせん。この恨は何所へ行かう、七日と経たないうちにこの家の者を祟り殺して見せると、斯

う申すが早いか、貴方、御隠居様、恐ろしい姿になりました、ハツタと私を睨み付けます。それまでは私も存じて居りますが、後は一切夢中、どこを何うして斯うお宅へ駆込みましたか、それから後は自分にも判からなくらいで御座います。」氣の好い隠居は、風の入る縁側に跼んでそれを聞いてるうちに、何時となく話にいまされてしまつた。年寄の情に弱い涙を頬先に見せて、

「それは又分別が無さ過ぎる男。何もこれが世間に類の無い事ぢやなし、せんも丁度年ごろ、先方さへ確乎とした、眞體な男ならば、また何うなと私からでも話を付けやうに、何所の男か知らぬが氣の毒な事しました。」と染々とした言葉であ

つた。

おせんは暗い柱のかげにもたれて、大きな目を据ゑて、打水の匂ひ立つやうな暗い庭を凝つと見詰めて居た。そして、黙つてツト暗い方へ立つて行つた。

長屋の婆も夜中過ぎ頃、若い者に送られてシホくと家へ歸つて行つた。

その翌朝。長屋の東窓に先づ日が赤く射した。

もう隣り近所は手足の伸びる秋口のころ好い眠りから醒めて、火打石の音、赤子の啼聲、紙帳を振ふ音、佛棚から穴錢をつかみ出してつまみ菜を買ふ聲と次第に日が上つて行く。

獨り住居の老婆は寝ながら昨夜のことなぞ考へつゞけて、寝不足の顔をうそ寒むさうにして、土に滲みる朝の日を見て居た。日の上を冷々とした冷氣が動いて、風もないのに木の葉がカサ／＼とさゝやいて居る。

婆は鉢巻して枕重さうに見せ、見あてもなく醫者なぞ頼んで、手づから薬々罐を煎じ上げて居た。もう一番煎じが沸き立つと云ふころ、露地口からカタコトと軽るい下駄の音が聞えた。

「媼さん、居て。」臺所からおせんの小さな聲であつた。

「心持は何うなの、媼さん。」

左の袂から蓮の葉に包んだ奈良漬瓜を片船、竈前の薪の上

にツツと置いて、お醬油がないなら又と云つてやさしく立ち掛けるのを、

「おせんさん、些いと。」と婆は寢床の中から呼び止めた。

「媼さん、御用。」呼掛けられて、おせんは當惑してそこに鼻白んで立つて居た。

「おせんさん、お前に上げようと思つてな、これを出して置いた。まアお上りな。」と婆は煤ぶつた芋桶を引擦り寄せて、紅の緞紐の付いた紫の革足袋一足、つぎはぎの珠子袋を出した。その中に離縁された時の去り證文も一緒に入つて居たが、これは手早く隠した。

そして云ふには、飛んだ事から死ぬ私の命は天に定つた運、

これは諦めもするが後を頼む娘も無い身の上ゆゑ、萬一の後の跡弔ひをお前に頼んで行きますと、婆は殊勝らしく聲を曇らすのであつた。

肩をすくめて聞いて居るおせんが目から涙が流れ落ちた。

「媼さん、堪忍して下さい。」と娘は我折れて疊に突伏して了つた。

「それほどの事なら、實を割つて初手から媼様に頼めば好いのに、……また、何うとでもなるのに私もう何うしたら好いでせう。」とおせんはオロ／＼聲で歎つて居る。

婆は背をさすりながら目さどくその様子を窺つて居た。

「おせんさん、お前本當にその氣になつたの。」

「本當ツて？ 媼さん。」

「いゝえさ、本當にその人を氣の毒とお思ひなのかよ。」

おせんは黙つて居た。

「お前さん、本當にその氣なら私も話すことがある。お前の心次第で、私の病氣は何うにもなるんだよ。」と云ひ出した。そして頼まれし樽屋の事を嘘眞實ませて、さも情深かく物哀れに染々と話して聞かせた。

「それほどまで思ひ詰めて居るんだもの、その思ひが何所へ行くものかね。私は本當にあゝも思ひ込まれるものかと思つて、恐ろしくなるやうだつた。」とまで言葉を添足した。

おせんは霧にでも包まれたやうな心持であつた。甘い悲し

みは身をひたすやうに、その一筋に育つて來た、ウブな娘の身内に流れた。自分で捉へられないやうな美しい心持になつた。

「媼さん、その人に一度會はして下さいな。」と偶と云つて了つて、後から氣が付いた。そして、獨りで顫へた。

婆は最う喜んで、あひゞきの場所を面白く考へて居る。

「然うだね、斯う氣の利いた出合所は。」と、あれこれ考へ廻した揚句に、「然うく、何所此所と云ふまでも無い、好いことを思ひ付いた。この八月十一日、お伊勢様の抜け詣りが一等だ。節も好し、所も好し、この上なしの思ひ付きと云ふもの。」と獨りでホク／＼決めて居る。

「媼さん、それでも、私……」
 「それにお前さん、斯う云つちや何んだけれど、それやお前さん男振りだよ。」

「媼さん……」

「第一、氣質が優しくて、私のやうな者へも始終面倒見た言葉を掛けなさる。この間もな、おせんさん。」

「字は書きますか、そして頭は何う結つてますの、職人だから後さがりで御座いませうね。媼さん。」

「まあ、兎に角會つて見てからの話だ。媼さん、恩に着ますと云はせて見せますよ。屹度。」と取混ぜた相談して居る所に、中居のくめが襷がけで水口から顔を出して、

「おせんどの、奥様が先刻から呼んでお出でですよ。」と云ふ。
 おせんは立ち掛けにもまた、
 「ちや、媼さん、十一日ですね。」と念を押して、日和の中をソワソワ飛んで行つた。

三

朝顔のさかり時。眺めるは朝露の涼しいうちと、前の晩より奥様の差圖に、裏畑に腰掛をならべ、花毛氈を敷き、重菓子入に焼飯、そぎ楊枝と用意がいそがしい。

「茶碗を忘れないで。明日は明六つの少し前に行水しますぞ。髪は三つ折で好しと、帷子はあの廣袖に桃色の裏付いたのを

出してお置き。帯は鼠繻子に丸づくしの方、それに那所は下町の方からも人が見るから、お前たちも氣を付けてね、補のあたつた帷衣なぞ着ては笑はれますよ。天神橋の妹のところへは、毎朝起きるぐらゐに乗物を迎へに出すんだよ。好いかい、お忘れでないよ。」

何から何まで細かくおせんに云ひ付けて、奥様は風の青々しい蚊帳の中へ樂々と寝てしまつた。それからスヤ／＼眠り付く軒を搔くまでは、女中ども代り／＼に團扇の風を送るのであつた。

八月十一日の夜明け前。

まだ仄暗い横町の婆が戸口をホト／＼と私かに叩く者があつた。

「せんで御座います。」と斯う云つて、中結ひした風呂敷包みを水口へ投げ入れて歸つて行つた。

用意の不足も心元なくて、燈火を點して中を檢めると、一寸つなぎの錢が五鐔、こま銀がこれこれ十八匁ばかり、白突が三四升、鯉節、守り袋に二つ櫛、染分けの抱へ帯、銀煤竹の裕、扇流しのや／＼くたぶれた浴衣、裏を解きかけた木綿足袋、赤鼻緒の草鞋、こんなものが入つて居た。

加賀笠に天満堀川と書いたは餘計なこと、笠の汚れぬやうに墨の字を拭き落して居るところへ、

「お母さん、先きに出掛けるよ。」と又門口の隙間から聲掛けて急ぎ足に行く男の聲があつた。

間もなくおせんは顛へながら入つて来た。

「早く、今の中に。」と唇の色も無く氣を立てゝ居る。二人して家を出た。

廻り路を足早に走り抜けて、やゝ胸の鎮つた時、「外のこととも違つての神参りだ。御苦勞だが私も伊勢まで見とゞけて上げやう。」と婆が云ひ出した。

おせんは厭な顔して、お年寄に長が旅は氣の毒ゆゑ、伏見からの夜船で直ぐ歸るようによめて見たが、婆は何うしても聞入れなかつた。

朝霧の白く立つ京橋を急ぎ足に渡りかけると、橋の上で向ふから來る手代の久七とバッタリ出遇つた。お番替りを見廻つての歸り道であつた。見付けられては是非なく、仔細あつて抜け参りと次第を話すと、それは好い所であつたと云つて久七は喜んで居る。

「私も常々御参宮を心掛けて居ました。願つても無い道連れだ、では、荷物は私が預かります。路用もこゝにある。丁度打つて付けたやうな話になつた。」と喰付いて離しさうも見えなかつた。

年寄は氣が氣でなく、清淨なる神参りにかこつけて種々と迷惑な同行を斷つて見たが、日頃おせんに思ひを掛けて居る

それでも老婆に、「何んだね、好いではないか、旅は賑やかなのが好い。此方にやお前と云ふ歴乎とした男の連れがあるんだもの。」と如才なく云ひくるめられて、横柄な顔付を不足さうにして居た。

斯うして樽屋は旅立ちのその日から同じ旅籠に泊つた。意嚮云はずに様子を見て居るのに、久七は兎角樽屋に油断を見せない。間の戸障子を明け放し、湯へ入るにも後に氣を残す様子が見えた。

その晩は月の光りが地の露に降るやうに注いで居た。

久七は寝ながら枕元の燈皿を弄つて居たが、皿が傾いたか灯がヂメ／＼と暗らく沈んで行く。すると、樽屋は手を延ば

しながら、「秋に入つても、この暑さはよ。」とつぶやきながら、頭の上の窓蓋を突き明けた。蒼白い月光が水のやうに疊の上へ流れ入つた。

おせんもうつ／＼して寝苦しうに見えた。白い肘をバタリと疊へ投げ出した。

「あゝあ、女は嫌だ。お産の難儀を考へたゞけでもゾツとする。ねえ、媼さん。私アもう御奉公さへ務め上げたなら、北野の不動様へ上つて御弟子にでもなつて了ひたい。サツパリして、その方が幾ら氣樂だか知れませぬね。」とポツ／＼と婆へ話しかけて居た。

「然うだともね、それが第一さ。」と婆はもう草臥れて現のや

うに聞いて居た。

明日の日は逢阪山の邊より大津馬を借りての旅。おせんを真中に久七と樽屋は兩鞍に乗った。

四人が四人、揃ひも揃うて參宮を心ざしての旅ではない。

内宮や二見へも掛けず、外宮を遠くからそこへに拜み、しるしばかりのおはらひ串若和布を調へた。そして、何んのこともなく京都まで下向する。

京都の宿は久七の計ひであつた。樽屋は今日までの取換へ、雑用の算用細かにして、「皆様、飛んだ御厄介で御座いました。」とあつく禮を云つてそこから別れた。久七は又おせんが爲めにそれぐの土産ものなぞ買つて来てやつた。そして、少し

用事あつて烏丸あたりの知合を訪ねに行つた後に、婆はおせんを連れてそこへに宿を出た。宿の者へは清水へ參詣する旨を云置いて出掛けた。

二人は兩側の軒々を探がし見ながら、祇園町の或る仕出し辨當屋の前へ來かゝると、そのの鈎簾に紙目印して鋸と錐とが書き付けて貼つてある。女の二人はその軒下をくゞつた。やがて婆は二階を下りて來た。さて、こゝは水が好いとて、煎じ茶を何時までも飲みはかつて居た。

樽屋はその日の晝船に乗つて大阪へ歸つた。

二人はそこから旅屋へ歸つた。そして、直ぐその日のうちに大阪へ下る用意であつた。せめて最う二三日が見物と、久

七が達つてとゞめたけれど、二人は奥様の意嚮も悪いとて聞き入れなかつた。
可笑しいは風呂敷包みを御迷惑でもと頼んでも、肩が痛むとて久七は手もかけないことであつた。また、大佛、稻荷の前、藤の森の茶屋に休んで、その茶代は銘々拂ひにして大阪へと下つた。

四

参るならば参るやうに、内へ云つて立つならば、通し駕籠なり乗掛けなり出してやるものを。物好きにも程がある。この土産ものは誰の何所の錢で買つた。私ども夫婦連れでもこ

んな贅澤はしないのに、好くも二人まで連れてノメくと下向した、おせんは女のこと、知らぬ佛に知慧つけたは、久七、みなおのれの業と、殊に内儀の腹立が一通りでなかつた。久七一人の罪にして疑はれる口惜しさに、九月五日の出替日も待つことなく、久七は暇をもらつて宿へ下つた。そして、程なく北濱の備前屋と云ふ上問屋へ年季を入れて奉公した。鬼に角年季をつとめ上げると、八橋の長と云ふ評判の蓮葉女と一緒になつて、柳小路と云ふ所にすし屋の見世を出して暮した。そして、おせんのことなどは何時忘れるともなく忘れて暮した。

おせんは變ること無くまめしく奉公して居た。その

中でも忘れかねるは樽屋の事である。夜となく日となく、唯うつら／＼思ひ思ふまゝに、思ひにつかれては自然女のたしなみも忘れ、自ら投出した身の男なぞのやうに聲太く、姿も日に賤しくやつれて行く。

丁度またこの頃、この家に不思議と云はれることが續いた。鶏が夜鳴したり、釜の底が腐つたり、氣になる事のみ多かつた。隠居女どもなぞ特にもそれを恐れて居ると、誰云ふとなく、これ皆せんに戀ひこがる、男の生靈の所作、その男は即ち樽屋と、もつばら噂する者さへあつた。

終には旦那も心配して、その樽屋ならばと、早速横町の婆を呼んで内談をとげて見る。すると、婆は勿體さうに、故と

首を括つて「さア如何で御座いませう。おせんさんは常々職人は厭だと云つて居ますから、快く聞いて呉れ、ば好御さんすがね。」と云つて、中々引受けさうもない。

「然し、そりやいらざる物好みと云ふものだ。男さへ確かで、身渡りが上手なりや、職人であらうと何んであらうと、差支はない筈。」と自身おせんを呼付けてまで、色々意見して見るのであつた。

談は決まつた。萬事は主人のはからひで、おせんに脇をふたがせ、鐵漿つけさせ、日取りを選んで嫁入りすることゝなつた。その時、旦那から出た持道具としては、二番の木地長持ひとつ、伏見葛籠一荷、糊地の挾箱一つ、奥さま着下しの

小袖二つ、夜着布團、茜緑りの蚊帳、昔染の被衣、その他取
集めて二十三いろ、外に銀二百目からあつたと云ふ。

二年、三年、おせんに幸福な月日は経つた。夫婦なかも人
に羨まれ、暮向も年増しに樂になつた。夫は正直一圖、おせ
んは又良人大事に、朝から一日縞物なぞを織つて活計をたす
けた。

二人の小兒さへ生れた。

五

來る十六日に無菜の御齋申上たく候。御來駕においては

かたじけなく奉存候。月日。町衆次第不同。麴屋長左衛
門。

斯う云ふ案内狀が廻された。先代麴屋の五十年忌にあたる
のであつた。

回忌も五十年になれば朝は精進しても、晩は魚類を出して
歌酒盛するも差支ないと云ふ。これが最後の法事ゆゑ、少々
の物入は心に掛けない、萬事はその積りでと云ふ主人の心持
に、近所の女ども出入りの女房だちも二三日前から臺所に集
つて、諸道具の取さばき、一々の布巾がけ、その用意にいそ
がしかつた。

樽屋の女房おせんも日頃懇意にして居る家である。せめて

勝手の働きでもと、櫛を袂に入れて手傳ひに行つた。おせんさんならソツは無いとて、内儀も喜んで勝手働きよりは納戸にある菓子を取合を頼まれる。おせんは頼まれるまゝに、饅頭、御所柿、唐ぐるみ、落雁、と人数に合はせて縁高に菓子を盛り合はせて居た。

そこへ入つて来たのは主人の長左衛門であつた。棚の上に乗せてある七つ組合はせの入子鉢を取下さうと爪立ちする途端、手元が三つて、器は結び立てのおせんが髪に落ちた。髪の結目が切れた。

「やゝ、これはトンだ粗相しました、どこも痛めはしませぬか。」

と亭主が切りに詫びあやまるのを、

「いゝえ、何う致しまして。」と、おせんには何んの仔細もなく、髪をグル／＼と巻き直して臺所に出て行つた。

麴屋の内儀はおせんの髪を不審さうに見て居た。

「おせんさん、お前さん髪は何うしたの、先刻まで綺麗に結つて居なかつたやうだが。」と、妙に底から見やるやうな目付をおせんに見せた。おせんは正直にありの儘を話した。

「フン。」と聞いて居たが、それは険しい顔であつた。

「旦那も旦那だ。親の法事をするに云ふその日に。鉢が落ちたぐらゐで髪が解けますかよ。」と、當付けらしく薄唇で罵りながら、ブン／＼して立つて行つた。

そして、その日一日は客の前、人の前、唯もう亭主とおせんに當り散らして、二人の中に仔細あると極め上げた口振りであつた。

おせんは耻よりも口惜しくなつた。勝氣から顔色は静めて、穩和しく耻を忍んでは居るものゝ、餘りに言葉過ぎた邪推、胸の中は顛倒するほど怒り立つた。それほどに云ふならば、見事に非をとげて、憎い内儀に鼻明かしてやりたいとも思はずに居られなかつた。私かに長左衛門を見ると、これも氣の毒さうにおせんを見て居た。

「何うせ、耻を搔いた身體だ。」おせんは外を忘れて、斯う一心に思ひ詰めた。

その後日が経つて、貞享二年、正月二十二日の夜であつた。この一日は寶引繩、歌がるた、女が春のなぐさみに遊び暮らす日であつた。夜が深けるほど遊び亂れて、負退きに退くものもあれば、勝ちて飽かずに進むもある。また、遊び草臥れて着所寢に軒搔くものもあつた。樽屋は晝一日の働きに草臥れて、前後も知らず眠り伏して居た。

おせんは夜深けの道を家へ歸ると、闇から男の聲に名を呼びかけられた。それが、麴屋の長左衛門であつた。内々約束したこともある。いやをいやで通しさうな男の素

振りではなかつた。これが、初めて男の手に觸つて。ひそかに暗がりの家へ引入れた。間もなく、猛り罵ぶ檜屋の聲が夜深を破つて家の外へ洩れた。

男はその場から遠い藤の棚まで遁げのび、知合の家へかくれる。おせんは今最後と自分から覺悟を極めて、道具箱の前匏で心臓を差し通して慘らしく死んだ。その死骸は、不義男の長左衛門と共に、さらし首にかけられた。

八百屋お七

この年もはや十二月に押詰つた。雲容あわたししく、北風のはげしい日が毎日つゞいた。町も人も明日くの新年にいそがしく、明方から餅搗く杵の音、煤掃きの笹箒、日はたゞその用意に明けて用意に暮れるやうにも見えた。商家の丁稚小僧は風頬を腫らして砂埃りの町を急いだ。小兒を使つて合力をねだらせる醜い乞食の群れが、夕暮の町そこゝに人を煩るさがらせた。その他、古札納めが来る、雑器賣りが来る、櫃、勝栗、かまくら海老、年迎への市は急がしく客を呼び立てゝ居る。通町にはもう破

魔弓の見世がならんだ。

年暮も愈々二十八日と云ふ晩であつた。凄まじい火は破れて、本郷の高臺をつゝんだ。見るゝ烈風に焼けひろがつて、火は下町神田の方までなびくほどの大火であつた。家、道具を失ふは勿論、その爲めに焼死ぬ人も少くはなかつた。

その本郷に八百屋八兵衛と云ふ商人が住んで居た。家も相應に暮らし、素性もさまで賤しい者ではなかつた。その一人娘にお七と云ふがあつた。色はやゝ薄黒いが、目涼しく牙えて、頸細く、その頃年も十六の評判娘であつた。

火が家近くまで寄せて来る。お七は母親に引き連れられて、一先づ旦那寺の駒込吉祥寺に立退くことになつた。火を除け

て寺々に難を凌ぐ者はこの二人ばかりではない。皆それらの所縁を尋ねて、寺々の宿坊はこれ等避難の人で一杯になつた。

年頃の娘を持つ母親はなにかと氣遣ひも多かつた。坊主とて油断はならない世の中だと云つて、その目張り固く出入りに監督して居た。幸にこの寺には避難の人も少なかつた。時は嚴寒の十二月である。寺の住職は用意も無い親子の身體をいたはつて、寺にあるだけの着換を出して貸してくれた。その中に栝銀杏のならば紋つけた、黒羽二重の大振袖が一枚あつた。

お七何氣なく取り上げて見ると、紅の燃える紅裏を山道に

裾取つて、そればかりでも仔細ありさうな仕立方であるのに、何時誰の焚き掛けの残りか、軽い香の匂がホンノリと小袖を揺うて居た。

年頃を見れば丁度自分と同じ頃である。何所いかなる姫君の着馴れた小袖、そして、見るもつらき親々の嘆きを籠めた寺への納め物と、偶と思ひ付いてお七の心は優しくも滯つた。歌の中の遠い人でも思ひ思ふやうに、お七は譯もなくその人が悲しくなつて、深かい睫毛が曇つて来る。急に悄れ切つて、小さな肩からホツと神経質な溜息を吐いて居た。

「又、癖が初まつた。」

母親は野に通る雲でも翳すのを見るやうに、はしやいだり

沈んだり決りのない娘の所作をこゝろ可笑しく眺めて居ると、お七はそれでも母親の珠數袋から珠數なぞ出して、暮方の空を眺めて悄悄と口の内に小さな題目なぞ眞面目さうに稱へて居た。

冬の日には匂ひ薄く暮れて、門前の寂しい表町から暮時のざわめきが幽かにくゝ空氣を動かして來た。顔を撫でゝ來る薄暗の中に凝つとして聞いて居ると、それが遠い世の聲でゝもあるやうな心持になる。

その時、本堂の障子を明けて、縁端に薄明りを追ひながら、銀の毛貫を片手に左の人さし指をいろつて居る品好き若衆があつた。あるかなきかと云ふさゝぐれ刺の指に立つたを氣に

して、切りとそれをさがして居るのであつた。

「どれ、私が抜いて上げませう。」

母親が毛貫を受取つて、さまざまに試みたけれど、手元が暗くはあり、年寄の目では覺束なく見えた。

お七はいつか題目も口の内に忘れて、自分ならこの目時の目で、ツイ譯もなく抜いて上げるにと思ひながらも、眞逆に此方から近寄りかねて、齒痒ゆさうに遠くから眺めて居た。すると、母親は毛貫を娘に渡して抜いて上げると云ふ。

「どんな刺？ 何所に。」娘は頼まれ顔に立ち上つた。

少年の撓やかな指は光るほど白かつた。そして、胎毛の細かい腕の肌は軟かにお七の腋窩に挟まれた。熱かい呼吸が娘

の額を掠めるやうにかゝつた。お七は自身の熱した血が、少年と同じく身體中に脈うつやうな氣がするのであつた。刺を抜いた後の毛貫を態と心付いて自分の手に持つて戻つて來た。

「難有う御座いました。癒りました。」

と若衆は禮を云つて白い指を吸ひながら自分の部屋に歸つて行く。

「あら、毛貫を。」

お七は斯う云ひながら後を追ひかけた。そして、仄暗らい廊下でそれを少年に渡した。手が觸つた。お七は屹とそれを握つた。そして、運葉らしく又バタ／＼と母の傍へ駆け戻つて來た。

お七はその日から少年の事を忘れ難くなつた。どんな人か、それも知りたい。或る時、茶飲み話に來た寺の納所坊主にそれとなく聞いて見ると、

「あれは、小野川吉三郎殿と云つて、家柄の御浪人ですが、仔細あつて當寺へ預けられて居ます。」と云つて聞かせた。

お七は小布を才覺して、朝から息をつめて町雑の着物を縫つて居た。横の齒で紅い色糸を噛み切りながら、

「何んですか、穩和しさうな人だわ。」故と母の前で大膽に云つた。そして、縫上つた着物をその方ばかり一心のやうに膝の上の伸しひろげて居る。

「穩和しいと云つたッて、あんな優しい人は滅多にありませ

ん。寺中での賞められものですよ。」と納所は何んの氣付かすに、吉三郎の日頃を賞め上げて居る。お七は心の中で嬉しかつた。又可笑しくもなつて、獨りでクス／＼笑ひたくなつた。母の目をかくれて、お七は手紙を書いた。腕がまひしなから消しく／＼して、やつとのことで長い文句を書き終ると、自分ながらガツカリ疲れるやうな氣持がした。吉三郎の方から使の者が變つて手紙が來た。それを見ると、自分の字の幼なく下手なのが腹立たしかつた。

然し、奥と表に別れて、二人は口を利く時も無い、お七は唯焦りに焦つては手紙を書く氣もなくなつた。譯もなく母親にあたり散らして困らせるやうなことが多かつた。

然う斯うするうちにその年も暮れて、新年が來た。寺で暮らす寂しい正月もお七には何んともなかつた。

松の葉が取れて、九日十日と日はたゞ徒らに過ぎて行く。

二

寒い雨がシト／＼と降つて居る。夕方からは粒もやゝ大きく冬枯の光つた枝に鳴り騒いで、黒い雲がたゞならぬ様子を

見せて空を亂した。

彼れ是れ夜中近くであつた。寺の門をドン／＼と敲く者がある。

「柳原の米屋、八左衛門より参りました。」

と云ふ聲が雨傘にバラ／＼降り付ける言に混つて聞えた。宵時、その主人が死んだ。思ひ設けた死人ゆゑ、夜のうちには葬式も爲すまじたいと云ふ使であつた。

住職は直ぐその用意して、伴僧一人連れて雨の中を出て行つた。その後は、七十餘りの飯炊き婆一人と、十二三の新發意が居るばかりである。夜が更け、本堂の高い瓦屋根に雨音が強くなるにつれて、雷鳴の音さへ混つて來た。

母親も乳母も雷嫌ひ、線香を焚いたり、年越の豆をまいたり、眞蒼になつて居る。天床のある部屋を尋ね廻つて小さくなつて寤んで居た。

その中でお七一人は別に恐ろしがる風も無かつた。

「何んだ神鳴なぞ。何がそんなに畏いだらう。」

と斯う云つてお七は笑つて見て居た。母親が自分の夜着を片袖着せようとしても、平氣で獨り起きて坐つて居た。

「そんな馬鹿を云つて、この子は本當に女のやうでも無い。」

と、然し母親は小言云ひ／＼いつの間にか眠つて了つた。

電の光りは、雨戸の隙間から洩れて、折々障子の紙に蒼く映つた。雨音もまけぬやうに降る。

お七は立つた。濕氣を呼んで冷たい廊下へ出た。そこを渡つて庫裡へ出ると、いづれその先に吉三郎の部屋があるに違ひない。こんな夜を何うして居るか、會つて話して見たいやうな氣がするのであつた。

廊下の障子窓は紙がピリ／＼音して顫へるやうに稻妻を映した。

「まア今夜の鼠の荒れること。」

些と耳の遠い飯炊き婆は、早寝の目を覺まして、ブツ／＼つぶやいて居る。

お七は可笑しくなつて、突と暗らい陰へかくれた。でも、年寄はやがてお七を見付けて、何か目で笑つて居る。顔を伸して方向を教へた。

「お婆さん、お前にこれ上げよう。」

潤達さうな目を明るく張つて見て居た娘は、締めて居た紫

鹿の子の帯へ手をかけるのであつた。

雨の足がやゝ鈍つて來た。稻妻が少し遠退いて空光かりして居る。

重い物が板敷へ落ちて、金屬の揺れ唸る音が暫らくの間高い本堂の屋根に響いた。その物音に十二三の小僧が紙燭つけて出て來た。緒の切れた常香盤の鈴を結び付け、抹香を盛り直して居る。柱のかげにかくれて居たお七は偶と嚇して見なくなつた。

髪をさばき髪を亂して、芝居で見覺えた恐ろしき顔付して、暗闇から小僧の前に跳り出た。小僧も後に退つた。けれども、直ぐその着物から娘を見付けた。

「馬鹿、何んだその態は。」と小さな目を固めて云つた。

「お前と寝に來た。」お七は驚かれぬのに顔もやゝ白らけて、突と走り寄りながら斯う云つた。

「馬鹿、何んだ。俺あチャンと知つてるぞ。」

「何を。」

「何んだツて好いや、俺は知つて居る。」

「馬鹿、小僧、何を知つてるのさ、云つて御覽、さア、はつきり云つて御覽。」とお七は娘らしく薄身の肩を突き出して寄つて行く。

「知つてるとも、フン、高い聲で云つてやらうか。」

「あ、云はれるなら云つて御覽。男ならハツキリ云つて御覽。」

と顔色を變へて居た。

「ぢや、俺に何か買つてくれるか。然うすりや云はない。」

「云はれたツて、私、好いんだけど。……ぢや何を。」

「それならば錢八十と、松葉屋の歌留多と、それから淺草の米饅頭五つと、それだけ。」

「屹度、それだけで好いの、そんなものなら明日でも直ぐ上げらるわ。」

「あゝ、それだけで好い、外には世の中に欲しいものはない。」と固く約束して自分の寢床へもぐり込んだ。そして、嘖語にまでその約束を云ひつゞけて居た。

雨が降る。

二人は言葉が無かつた。吉三郎は經机にもたれて、肱の間に頭を深く固く埋めて居た。お七はその肱を引つ奪くるやうに荒々しく外して、

「まア、髪がほぐれるのに。」と云ふ。

吉三郎は切なげに顔を机から離した。息の乾いた聲で、

「私は十六になります。」と俯向いて云つた。

「わたしも十六になります。」

吉三郎は又云ふ。

「私は長老様が畏い。」

お七又云ふ。

「俺も長老様が畏い。」

そして二人ながら、俯向いて涙をホロ／＼零して居た。

雨は又はげしく降りそゞいで、神鳴が轟くやうに鳴り騒いだ。

蒼白く射す稻妻は濡れた雨繁吹の中に、硫黄臭い匂を殘

して過ぎた。

夜が明けた。

お七は母親に引立てられて、庫裡の離屋へ歸された。そして、その後は唯母の厳しい目のかげに小さくなつて居た。

すると、新發意はお七の前にふさがつて昨夜のことを忘れないで居て、約束の三品をくれねば、この事誰にも話してし

まふと立騒いで居る。煙管の吸口を唇に押付けて居た母親はそれと聞き付けて、

「何か知れませぬが、娘がお約束したもものなら、屹度私から差上げます。」と固く約束して行つた。

そして、明日の日は早々にその品々を買ひ整ひて新發意へ送つた。

日が経つた。

三

世の譬にも墮落僧の傍に娘は見せまじき物の一つにして居ると、母はたゞ娘の不行跡を案じて、匆々に寺を引き揚げて

俄普請の家に歸つた。そして、少年のことなぞかりそめに思ひ出しても罪のやうに嚴しく云ひ聞かせて置いた。

然し、そこにはまた物好きな下女と云ふものがあつた。その者の才はじけた智慧から出て、二人の間には度々手紙の遣り取りがあつた。

春の雪が冷たく降る夕暮であつた。板橋あたりの貧乏人の子とも見えるのが、凍えながら手籠に入れた松露土筆の類を店頭で賣りに來た。お七の父親はその荷を買取りながら、外を眺めると灰色に低く曇つた空から雪が綿のやうに降つて居る。駄馬の通つた後は股もぬかるやうに泥が深かつた。

「お前、板橋と云つたが、この雪ちや大變だ。今夜はそこの

土間に寝て行け。夜が明けたらば直ぐ歸るんだぞ。」と年寄の親切から斯う云つて見世先きの土間を借してやつた。

小兒は喜んで、自分でそこらを片付け、被つて来た竹の子笠を顔に、濡れた腰笥を被て、筵にくるまつてその夜を明かす用意であつた。

動き易いお七の目は、内暖簾の中から氣の毒さうにそれを見て居た。下女の梅に云ひ付けて、寒さ防ぎに熱い鹽湯なぞ與へた。うめはそれを番頭の久七へ渡した。

「有難う御座います。」ガタ／＼顫へながら小兒はしほらしくも涙含んだ聲であつた。

「可哀さうに親々が悪るい。お前幾つになんなさる。」と下男

の久七は踊んで用の無い事まで聞いて居た。

「はい、十六になります。」

「このの嬢様も十六。それにしても百姓には惜しい、華奢な生れた。これでも家に居ては農仕事なさるか。」

「馬の手綱を曳いたり、草鞋を作りましたりして。」と小兒は顔をかくして暗い隅に小さくなつて居た。

臺所には下し水が寒く響いた。壁の隙間から吸ひ込む寒さは土を鳴らして身にせまつて来る。少年の齒はカチ／＼と音して顫へた。

その中に刻限の寝時が来た。奉公人どもは打付梯子を上つて暗らい店二階へ上り、主人夫婦は火の元の見廻り、戸締りを

してそれ／＼の寢間へ退いた。

夜が深けた。上野の鐘が八つ鳴った。その夜中の雨戸を下
ン／＼敲いて、取り急いだ女と男の聲が聞える。

「お神様、唯今およろこびが御座いました。若様です。もう
旦那様も大變なお悦び。」と出産の報知を云ふ者がある。

「お、お、それは／＼御苦勞様に。」と老夫婦を初め家内中起
き上つての悦びであつた。

そして、夫婦は着物着更へる暇もない。寢間着の上に短羽
織を引掛て、お七に後の戸締頼でソワ／＼として出て行つた。

お七が部屋に歸りざま、偶と氣が付くと先刻の小兒が土間
に歸くまつてスヤ／＼眠つて居る。

「お前些いと。」と下女に手燭を持たせてお七はその寢姿を見
て居た。

「快く眠つて居ます。ソツとしてお置きなさい。」と下女が云
ふ。お七はそれを聞かぬ振りしてソツと傍へ寄つて見ると、兵

音卿らしい焚香の匂ひが鼻についた。好く見ると上着に似げ
なく淺黄羽二重の下着をかさねて居る。例の好奇心が出た。

ソツと笠を取除けて見ると、それが吉三郎であつた。

「まあ、吉三郎さま、何うしたの。」と思はず叫んだお七の聲
が高かつた。

吉三郎は目を伏せて、暫くの間言葉は無かつた。蒼味ある
軟かな肘を膝の上にあいて居た。

吉三郎

吉三郎

「まあ、兎に角、此方へ被行い。こゝちや困るわ。」
 とお七氣を揉み引立てゝも、吉三郎は宵からの冷氣に身體が
 自由に動かない。やう／＼の事で、下女と二人手車を組んで
 少年をその上に乗せて、自分の寢間として居る裏二階へ連れ
 上げた。そして水を與へ、藥を與へて介抱した。
 そこへ、父親だけ一人氣忙しく、甥の家から歸つて來た。
 足音に顛動して、慌てゝ吉三郎を衣桁のかげへ秘ませる。そ
 して何氣ない笑ひ顔して父親を出迎へた。
 「おはつ様も丈夫？　どんな兒なの。」と何氣なく見せた。
 「一人の甥だし、それに初産だから、私も何うだらうと心配
 したが、これで本當に重荷を下したやうだ。」

父親は唯もうホク／＼して悦んで居るのであつた。
 「本當に好御座んした。あちらでも大喜びでしたらうね。」
 「それにしても、産着だて。何うしたもんだらう。いつそ總
 祝ひの心で、鶴龜松竹の擦り箔は何うだらう。出す入らずだ
 から、私はそれが好いと思ふのだが、お前は何う思ふ。」と老
 寄は氣短かに氣を揉んで居る。
 「まア、そんな事、明日にしても好いでせう。もう今夜は遅
 い。」とお七は氣が氣ではなかつた。
 「いや、いや。然うぢやない。こんな事は早い方がいい。」と落
 付拂つて煙草盆をたゝいて居た。
 それをやう／＼に云ひなだめて寝かすと、もう一番鶏が鳴

いた。屋根の霜が鎖つた夜氣の中に鳴いた。

お七は灯の影に硯紙を置いて、熱した二人の心持を紙に書いては、見せたり見たりしてその夜を明かした。悲しい夜が明け放れた。

四

悲しい日は續いた。お七は思ひ思ふ日夜に責められて、や物狂はしい悲しみに瘦せて行つた。もう、手紙に書いた自分の心持に満足するやうな事は出来なくなつた。ある夕方空風の騒ぐ空を眺めて居ると涙は止度もなくその美しい頬に流れて来るのである。咽頭の下からスツと軽るい羽毛でゝも撫

でられるやうに悲みが身體までを擦ぐつて来る。

偶と舊臘の大火事を思ひ出した。そして、樂しき、夢のやうな或る日或る夜の思ひ出がそゝるやうに軟かい胸板を貫いて上つて来た。

お七は鋭くその耳を引き立てた。風は烈しく外を吹き暴れて居る。

火と云つてもほんの烟が少し立騒いだに過ぎなかつた。火のある所ではなし、人々不審に思つて彼是れ物色すると、自然にお七の顔に様子が顯はれた。問ひたゞして見ると、お七はつゝまず自分の罪を話した。その頃、特にも放火の掟は嚴重であつた。

瘦馬にかき乗せられたお七の淺間しき姿は市中ところ／＼の木戸前に曝された。今日は神田のくづれ橋、又は四ツ谷、淺草、芝、日本橋と見る人の評判となつた。

然し、思詰めたお七は顔のやつるゝ事も無かつた。毎日髪を昔通り美しくあげて、つや／＼しく見えた。そして、時鳥の鳴く四月末、いよく最後と刑が定まつた。刑場に引出されて。かくと申渡されても然まで取騒ぐ色は見えなかつた。無想の間に死にたいと云つて、首をさしのべ唯一心に念佛を申して居る。

役人も不憫がつて、咲後れの櫻を一枝手に持たせると、お七はそれを眺めて居たが、世のあはれ、春吹く風に名を残し、

おくれ櫻のけふ散りし身は、と云ふ辭世の歌さへ讀んだ。そして、その夕暮、見物の群集に見送られながら、立のぼる白煙の中に命をすてた。

場所は鈴が森、火あぶりの極刑。この時お七は十七であつた。翌朝になつて見ると、もう一念の形は無く、焼落ちた灰が白く冷えて居た。

その日の装であつた小袖の郡内縞の小切は、世間の人それからそれと拾ひもとめて、世に物語のたねとなつた。

それにしても娘の相手、その少年は何うなつたらう。最後の時にも姿を見せなかつた不思議と、諸人の噂は斯うあつたが、然う云はれる吉三郎は丁度その頃、お七の事を思ひ煩ひ

に重い病氣にかゝつて居た。話して聞かせたら生命のほども危いと氣遣つて、唯秘しかくしに隠して暖氣にも聞かせぬやうにして居た。

「今日明日には必らず見舞にも來る筈になつて居る。それによつても氣を慥かに持つて。」なぞと、傍からは唯はげみを付けて居るばかりであつた。

「何うしたんだらう。未だ來ませんか。」と病人は熱の嘔語にも斯う云つてお七を待ち詫びて居た。

寺内の人々は、二七日、三七日、その日くゝの當り忌には吉三郎にかくして忌を營んで居た。

四十九日も來た。親々親類の者どもは、當り日の盛り餅な

ぞ持つて寺詣りに來た。せめては形見のその少年に會はしてくれとある。寺方でも仔細を語つて、それを慰めると、親々も是非なく吉三郎の身大事とあきらめて歸つた。娘が最後に言残した言葉なぞ言ひ置いて、力なくトボくと歸つて行くのであつた。

五

吉三郎の病氣はお七が百ケ日の頃から、やうく枕が上がるやうになつた。同じくは吉三郎もこの病に死んだら恨もあるまいにと、人々噂して居たが、思ふやうにならぬものであつた。

秋日の薄すく射す日、吉三郎は杖にすがつて寺内をブラブラ歩るきに歩るいて廻はると、白々した秋風に吹かれて新しい卒塔婆の立つて居るのに心付いた。見るとそれにお七の俗名が書いてあつた。

ハツとして自分の部屋に駆込み、泣きながら短刀に手を掛ける。寺の人々も大騒ぎしてそれを止めた。

「何うせ死ぬなら、貴方には暇乞する義兄様があられる筈だ。私はその人から仔細を云つてあなたを頼まれたもの。今萬一の事でもあつて、私の迷惑も少しは察して頂かなければなりません。」

寺の僧どもから斯う云つて意見されて見ると、それにも相

應の理窟はあつて自儘に自分を始末することも出来ない譯があつた。と云つて、このまゝに生存ふるも心苦しい。思ひ餘つて苦心を寺の住職へ訴へると、住持は顔の色を變へて驚いた。

「そなたの義兄御は今松前への勤番、この秋過ぎには必らず出府すると云ふ音信も来て居る。その後ならば知らぬ事、その前に萬一の事があつては、私はその人へ申譯が無い。」

と、これも呉々の意見であつた。日頃の恩誼、親切も思へばこれも無下には斷られない。たゞ、唯流れに流れる涙をすすり上げながら、

「承知しました。それまでは決して御心配をかけるやうな事

は致しませぬ。」と斯う云つてお請けするより外は無かつた。そしてその後は住職にも油断が無い。始終見張りの人を吉三郎へつけて置くことにした。

部屋へ下つても、吉三郎はたゞ身悶えして泣いて居た。朋輩の者どもへ打口説く言葉の中にも、打背いた松前の義兄を思ひ出しては泣き悲むのであつた。その人に濟まない、その人が歸らば合はせる顔が無い、その人の歸らぬうちに身を決したい。と斯うばかり云つて泣いて居る。

「私も武士の子。舌を喰切つたの、首を吊つたのと、笑はれる死方はしたくない。御慈悲だ。その一刀をかして下さい。」と斯う云つて顫へて居る時であつた。聞く人はたゞその心を

泣いて聞いた。

その事が、何時となくお七の親々が耳へも入つた。父親が故々寺まで出向いて来て、

「そのお心は御尤もですが、臨終の時に娘がクレク云ひ残した一言も聞いて頂きませう。吉三郎様の御心に欺りが無いならば、何うか身を出家に捨て、私の無い後冥福を祈つて下さい。これが何より私への親切。あの世は屹度お待ち申しますと、固く申置いて死にました。」

様々云ひなだめても、吉三郎は蒼褪めた頬を顫はすばかり、決心を思ひにぶる様子は更に見えなかつた。

今ではもう舌を嚙切つても自殺を急ぐ様子に見えた。

すると、母親は何んと思つたか吉三郎の耳に何かしぼし囁いて居た。他の人々には何んの仔細とも様子は知れなかつたが、吉三郎の顔色は不思議に動いた。静かにうなづいて、

「兎も角も。」と斯う云つて死を思ひ止まるのであつた。

その後、松前からその義兄と云ふ人も歸つて來た。そして、その人の意見もあつて、吉三郎はあはれ前髪を剃り下して出家となつた。生命がありながらも、お七の最後よりは氣の毒と見る人々の噂であつた。

吉三郎の義兄と云ふ人も、又松前へ歸つて出家になつたと云ふ。

吉三郎の僧は世に美男として名高かつた。然し、何れ何國

の寺に堅固の住持となつたか、その長い後の事は誰も知らなかつた。

お夏清十郎

播磨の國室津港は、海も穩かに船のかゝりも好い、その頃西國に聞えた大港であつた。

その港に和泉屋清左衛門と云ふ名高い酒造家があつた。家業も繁昌して何一つ不足ない上、清十郎と云ふ世に勝れた美男子の忤さへあつた。

この清十郎、元來が女に好まれる生れ付き。まだ十四五の頃から放蕩に身を持ち頼して、八十七人あるとか云ふこの港の遊女どもに、誰一人見知らぬ顔もないと云ふほどであつた。それ等遊女の中には固い約束の誓紙を取換はした者もある。

爪を抜き、髪を切つて男に心中見せる女も數々あつた。招出しの文は毎日のやうに來る。節々に女の方から送つて來る紋付の送り小袖の數も多かつた。清十郎にはそれが自慢、浮世藏と名を付け、蓋に書き附け箱に納つて喜んで居る放埒さ加減。世間では、「今に見ろ、屹度身のつまり。」と噂して、蔭ながら心配するものも多かつた。

その頃相互に深く陥ちて居た女をみな川と云つた。家も世間も忘れた遊び振り。果ては月夜の晩に提灯を晝と點させ、又は戸障子閉め切つて晝の無い國の眞似して遊ぶと云ふ始末。こざかしい幫間を大勢寄せ集めて、夜警の拍子木やら、蝙蝠の鳴く眞似。花車女に門茶を焼かせて天王寺の歌念佛を唱ひ

の真似、死にもしない久五郎が爲めだと云つて精霊棚を祭つたり、小楊枝を盆に燃して送り火の真似。夜と云ふ夜の真似を爲盡すと、もうそれも面白くは無い、世界の圖にある裸島の遊びしようとして、いやがる女郎どもを無理にも、帷子脱せてそれを當座の興に、埒もなく遊び耽つて居た。

父親清左衛門はその遊蕩に愛想をつかし、或る夜、悴の遊び宿を探し出して、自身その席へ押通つて、散々の折檻であつた。言葉をつくして詫入るのも聞入れない。

「何うともお前の勝手にするが好い。私はもう會ひますまい。」とキツバリ勘當を申渡して歸つて了つた。

みな川初め女どもは泣き出すと云ふ、もう取つて蓋の無い

始末。すると、太鼓持大勢の中に闇の夜の治助と云ふ男、解つたやうな落付いた顔付して、

「男は裸百貫とさへ云ひます。寺師匠したつて、お天道様にはぐれもしません。詰らない心配なさるなよ。若旦那。」と忠義がほして云ふ。

こんな騒ぎの中にも、その言葉つきが可笑しいとて、それを肴にまた他愛も無い酒盛が初まる。

斯うなると、もう揚屋では現金に薄情見せて、手を敲いても返事もしない。云ひ付けた通し物も次第に錆落ちして、茶を飲みたいと云へば、兩手に天目二つ持つて来て、歸りに竊と行燈の燈心を減らして行く。用も無いのに下から煩さく女

どもを呼び立てると云ふ始末。

みな川の身になつては悲しい事ばかり、獨り残つてシヨンボリ涙にくれて居る。清十郎も無念は同じである。いつそ死んでこの恥から遁れようとも思はぬでもないが、さすれば女も一緒にと云ひ出すのが決つて居るだけ不愜でならない。兎角に思ひ煩つて胸を痛めて居た。

みな川にはその心持が好く見える。

「清さん、お前さんは死ぬ氣？ 然うでせう。一旦のことでなく、好う考へて御覽なさいよ。それが短氣と云ふもの。私だところで、そりや一緒にとも思ひますけれど、何んだか私は死にたくない。又その中には變つた事も出来るもの、も

うこれまでの昔と諦めて、綺麗サツパリ分れようぢやありませんか。」と打消れながらも足を固く立つて行く。

これは又餘りの意嚮違ひ。清十郎も我が抜けて、いかに賣女なればとてこれほど輕薄な女とは思はなかつた。今までの約束もあることにと、口惜し涙を流して立ちかけるところ。みな川は何時の間にか、白装束に着換へて、襖を荒く蹴込んで来た。清十郎へすがり付いて、

「何所へ行くの。さ、早く、今のうち」

と用意して来た一對の剃刀を袖から出した。清十郎もまた喜んで、女と一緒に自害せうと心を決めたところへ、家の者大勢飛び出て二人を引分け、みな川は親方の家へ連れ歸れば、

清十郎は人々取まいて、旦那寺の永興院と云ふに送つた。一つはそれで親々の怒りも解く爲めもあつた。清十郎は十九であつた。

二

「それ、今のうちだ。」

「醫者の使は何うした。」

「氣付薬だ、何を狼狽へて居る。」

皆度拍子を失つて騒いで居る。主人の家でみな川が自害したのであつた。騒いだ甲斐もなく、みな川の脈は切れてしまつた。

清十郎も死後れる心はさら／＼無かつた。然し又、慈悲を籠めて使の者に言送つて来た母の一言もある。兎も角もと、生命をながらへ、或る夜ひそかに預りの永興院を抜け出た。姫路には知る人もある。それを便りに尋ねて行つて見ると、その人も清十郎兩親に受けた恩を忘れずに居て、何かと親切に扱つてくれた。そこに日數経つうちに、同じ所の但馬屋九右衛門と云ふ商人の家で、店を預ける手代を探し求めると云ふ噂を聞いた。後々、親々の訃にも都合が好からうと、世話になる人夫婦も切りとすゝめるので、清十郎もその肝煎うけて、初奉公に出て見る氣になつた。

素より育ち柄は賤しくない。才氣もある。これまでの放縦な過去に自ら倦きて、新しい生涯を築き上げようとする努力もあつた。自然、身を捨て、働くことになる。主人もその律義を見て、末々の便りにもと、店のことは萬事をまかせ、出来るだけの目をかけて居た。

九右衛門におなつと云ふ妹が一人ある。その頃十六であつた。婿選みして未だ定まる良人は無つた。近所廻りに評判の容色で、これぐらゐの女は田舎は素より、京都でも素人には先づあるまい。この前、島原に揚羽の蝶を紋所につけた遊女があつた。あれに増すとも劣るとは見えぬと噂する都會人もあつた。

ある時、清十郎は平常締めにして居た龍紋の帯が、餘りに幅の廣いは人目も好くない、好い加減に縫ひ直してくれと、仲居女のかめが所へ頼んで來た。頼まれて何氣なく帯をほどいて見ると、紙數十四五枚ばかりも舊る手紙が中から出た。宛名は皆清さまと書いて、裏書は皆違つて居る。

花鳥、うきふね、小太夫、明石、卯の葉、筑前、千壽、長州、市之亟、こよし、松山、小左衛門、出羽、みよしなど、何れも室津の遊女の名である。

その何れを讀んで見ても、皆遊女の方から陥ちて、男を慕ふ心持が書いてある。貞操の無い渠等仲間の書いたものと思はれぬほど、切なき優しい誠氣を訴へてあつた。

お夏もそれを讀んだ。そして、その日から妙に清十郎を思ふ日が多かつた。

何所に引く所あつて、斯うまで世馴れた女の心を奪う、何かあるに違ひないと、世に目の開きかけた娘氣にはそんな事までゆかしく思はれるのであつた。それから後は清十郎から心が離れない。その人の前へ出ると妙に胸が固くなつて、顔を見られるのも耻かしい。女と云ふ女を知り抜いた男の目が恐ろしいやうにもあつた。

下々の女ども、知つてはお夏の心をあはれがつた。その心を達けてやりたいと氣の毒がりながらも、又然う思ふ銘々も清十郎には深く引付けられて居るのであつた。

お針の女は針で血をしぼり、その心を書き送る。仲居は人頼みして、清十郎の袂に手紙を投げ込む。腰元は搬ばでも好い茶を見世まで搬んで清十郎を見るとさへ云はれたぐらゐであつた。

或る時、抱き乳母の手から主人の坊様を借りて遊ばせて居ると、膝前を穢ないものに濡らされた。すると、乳母は兒を抱き取りながら、こんなことを云つた。

「好い氣味、く。お前さんもあやかると好い。私も先の亭主に美しい子を産んだ。先の人と云つたッて、そりや、散々なやぐざ者で、今は何んでも熊本あたりへ行つて奉公してる

ツて事ですが、別れてから今日まで一度だツて思ひ出しもしない。と、厭味を持つた云ひ方であつた。

人々のこの親切、清十郎にしては嬉しく悲しかつた。終には煩くなり、知らぬ風に見過して居た。

その中に、お夏からも艶めかしい手紙があつた。今の清十郎にもこのお夏だけは心を引いた。こちらからもまた心をこめた手紙を返した。

然し、家には厳しい掟。奥と見世とは滅多に口を利くことさへ出来ない。特に女どもを取締るのは兄の嫁である。門の襖さへ明けることが難かしかつた。

三

春もやゝ深つた。櫻の噂が日に／＼高い。良人ある妻もその姿をほこりに、美しくい娘もつ親々はその娘を見られに行く。但馬屋の女づれも女中駕籠をつらせて一日の野遊びがあつた。その宰領は清十郎に擇びあてられた。

内海の静かな波音は、立籠めた和氣の中からゆるやかに聞えて来る。そして、日をうけて蒼味を持つた砂濱につゞくバラ／＼松は目に軽く若々しい緑を映した。煙るやうな潮日和の中を、熊手もて松露を採す村の小兒らの歌も聞えた。路傍には茅花の穂綿が白く光つて居る。

その所々の景色を見て、花菴しかせ、毛氈しかせて、今日
 一日の春興に耽ける人々の連が到る所にあつた。

但馬屋は女づれ、男は清十郎一人であつた。春に酔ひ酒に
 酔ふ花見の若い人々は、小袖幕の外から、ソツと内をうか
 ひ見て行くものもあつた。

清十郎は交る／＼の盃を引受け／＼飲むうちに、ツイ酔ひ
 顔れて、若草の廣々しい野の中にそつと抜け出して、一人
 れて寝て居た。蒼い風が折り／＼その顔を吹いて過ぎた。

もう夕暮と云ふ時、遠くから太い細い太鼓の撥音が野面を
 聞えた。それは斯う云ふ遊び所を見掛けて、寄り来る太神樂
 の囃し音頭である。萌黄を被つた、勇ましい獅子頭は陽炎の

チラ／＼する緑野を跳り狂つた。女どもは騒ぎたつて皆その
 方へ走せ集つた。

おなつ一人幕の内に残つた。先刻から齒が少々なやむと云
 つて、白い指に頬を抑へて居た。帯のやゝ空解けたのも知
 らず、被替の小袖をつみかさねた中に俯伏して、美しい眉を
 擧めてうづくまつて居る。

野も海もうつすりと暮れ近い。浅い潮の匂を乗せた大氣は
 揺はすやうに菜の畑、麥の青い畑をつゝんで次第に身の周圍
 へせまつて来る。凝つと一つ所を見詰めて居ると、やゝ冷か
 な夕風が動くとも無く頬をなで、心の底が美しく餓ゑたや
 うな氣味になつた。遠い何所からか幽かに人の聲が聞えて來

る。
 お夏は妙に佻しく悲しい心持であつた。又、自分一人物にはぐれたやうないらくした氣になつて、煙り立つた遠い野末を眺めて居ると、自然と心が重く曇つて來るのであつた。清十郎は偶と目を覺して、おなつ一人が幕に残つて居ることに氣が付いた。そして、松の繁げり立つ小徑を幕張りの方へと近寄つて行く。松の間は濃い色に空氣が凝つて居た。砂地が薄暗く暮れて居た。

興半ばにして、獅子舞ひは曲の手をやめた。その時、清十郎は幕の外に立つて、何氣なさうに雲に光る夕燒の空を眺めつくして居た。

女どもは残り惜しさうに太神樂の圍を解いた。

野は紫色にトツプリ暮れた。

おなつは身體に虚が出来たやうな、悲しい然し嬉しい思を駕籠にゆられながら姫路の家へ歸つた。

四

同じ國飾磨の港から上みがた通ひの船が出る。月のある晩、清十郎はお夏をソツと連れ出し、主人の家を

奔つた。お夏はたゞ男の云ふがまゝである。同じ苦しく住まば、せめて世を廣く渡る心だつたのである。その日一日は片浦の寂しき漁師町にかくれて、旅用意も薄く出船を待つてそれへ乗つた。

早船には乗合の人が詰めて居る。伊勢參宮の親子づれもある。大阪の小道具賣と云ふ目の險しい若い男もある。奈良の具足屋、醍醐の法院、高山の茶筌師、丹波の蚊帳賣り、京の吳服屋、鹿島の言ふれ、國も言葉も違ふ人々の寄合であつた。船頭は沖聲張り上げて、

「さア〜出します。銘々さまの心祝ひだ、住吉様のお初穂願ひます。」と乗合の頭數を讀んで一人前七文づゝの集錢を柄

杓に寄せ集める。そして、酒の行く客は間鍋もなく小桶に汲んだ濁酒を、肴は乾魚のむしり喰ひ、茶碗飲みして景氣を付けるのであつた。

「お客様方ア幸福だ。風は真向だ。」

帆に八合ばかりの風を持たせて、やゝ小一里も沖に出た頃、胴の間にすくまつて居た備前からの飛脚男が、

「あ、失敗つた。あれほど氣を付けて、刀の柄にくゝりながら忘れて來た。」と眞蒼になつてうろたへ騒ぎ初める。

「飛脚殿、何を忘れた。」と口を出す人もあつた。

「大事の状箱、持佛堂の脇にもたせて置いたまゝだ。」と飛脚は鈍さうな顔を混雜させて居る。

「さては、お前さん、何處ぞへ港で寄んなすつたな。」
 「何有、ほんの些いとの間でした。」と艦へ上つて陸の方を見
 て居る。

「は、は、は、あれだ。お前さん女の子に可愛がられなす
 つたに違ひない。」

「可愛がられるも、貴方、ほんの些いとの間なんです。」と泣
 きさうになつてオロ／＼途方に暮れて居る。

「好く魂を女郎の部屋に置き忘れなかつた。は、は、は。然
 し船頭どん、外の事とも違ふで、まア仕方が無い、船を戻し
 ておやんなされ。」

船中大笑ひしながら斯う云ふので、船頭は楫取り直して又

もとの港へ歸つて来る。乗合は首途の幸先を折られて、ブツ
 ／＼口小言を云つて居た。

船が陸へ着くと、陸には大勢の男が待ち構へて居た。

「この船だ、今出た船だ。些いと調べます。」と叫きながら、
 ドヤ／＼と中へ入り込んで来た。何れも二人を尋ねて但馬屋
 からの追手であつた。

泣き叫ぶ二人は慘く引き分けられた。お夏はきびしい乗物
 に押籠め、清十郎は繩にかゝつて姫路へ引き上げられた。そ
 の様子氣の毒と見る人も多かつた。

「清さま。」

「お夏様。」

若い二人の聲が闇を通して取り換はされた。

その日から清十郎は座敷牢の住居であつた。世も無く、人も無く、唯一筋の戀に思ひ憧がる、渠は、自分を忘れて唯お夏がことのみ口走つて居た。そして、状箱忘れて己れを縛らせた飛脚をのみ恨んで居た。

「寧ろ殺してくれ。」と絶望から斯う罵り騒いで、自分の舌に齒をあて、目を瞑つたことも幾度かあつた。けれども又、思ひ返せば、せめて今一度おなつを目の前に見ることもあらうかと、その決心は甲斐なくも後から鈍つて來るのであつた。番する人々もその心に動かされた。さまざまに云ひ慰めて

渠の危険に目も離さなかつた。

お夏もまた同じ嘆きに日を暮した。七日の斷食もした。そして、切なき心を願狀に認めて、それを室の明神へさゝげて、思ふ清十郎が命乞ひもした。

疲れて眠る夜はさまざまの夢にも見た。或る晩は白髮の老爺が枕に立つて清十郎の命の今日明日と教へる夢も見た。お夏は冷たい目を覺して、枕にすがつて夜明けまで泣いた。

間もなく清十郎は召出されて、思ひも寄らぬ冤罪に問はれた。それは、但馬屋の内藏に藏ひ置いた小判七百兩の紛失から押して、テツキリお夏に盗ませて奔つたと云ふ嫌疑なのであつた。言譯は立たず、春も深い四月の十八日と云ふに清十

郎は刑場に死んだ。

この時、清十郎は僅に二十五の世盛りであつた。その後六月、藏の蟲干をするに、無いに決めたその七百兩が思ひ掛けぬ他の車長持の中から出た。

五

お夏は清十郎の最後とも知らなかつた。一圖に戀ひ慕ふ日が多くつゞいた。

静かに暮れる初夏のある夕暮、仄暗に搖ふ寂味に胸を締められながら、聞くともなく外に耳を聳て、聞くと、町の小兒どもが聲を揃へて軒下を歌うて行く。

清十郎ころさば、お夏も殺せ。

小さな聲は斯う聞える。

それでは、と心が閃いた。自分をそだてた乳母を呼んで聞いて見ると、乳母は答へもせず、唯涙を膝さきに流して泣いた。お夏は蒼味かけたその深い眸を凝と一所に寄せて居た。

生きて思ひをさしやうより。

その場から突と小兒の中に走り出で、斯う云つて音頭を取つた。そして、ハラ／＼と泣き、泣いた。

「むかひ通るは清十郎でないか、笠が好く似たすげ笠が。やは／＼ん／＼。」

斯う唄ひ狂ふお夏にはもう定まる心がなかつた。唄つては

泣いた。また舌を明けてケラノ、笑つた。斯う笑つて町も歩いた、野も歩いた。或る時は又遠い山里をうろつき廻つて、路傍の青草に臥て、その上に夜を明かすこともあつた。男の仕置うけた場所には程なく四五本の松が植ゑられた。人それを清十郎塚と呼んだ。それは渠の生前を知つた人々が寄り集つて、冤罪に死んだ其の魂を慰める計畫であつた。お夏はものに引かるゝ人のやうに、夜々この塚のほとりに来て吊つた。空を見詰めて泣く少女の目には男の姿が、まさしく現はれたとしか見えない。

清十郎死んで百ケ日目の日であつた。人々跡をさがして塚

に行つて見ると、お夏は守り脇指を抜いて今を最後と思ひ定めて居る時であつた。人々は慌て驚いて、その手に縄り付いた。

その中にも分別ある人は、お夏に説いて出家をすゝめた。死んだ人の爲めに死んで何になりませう、後生を吊つてやるこそ眞の親切、と斯う云つて説いた。

お夏はその言葉に従つた。

そして、正覺寺の上人に頼み、年十六の髪をゴツと剃り落した。朝に夕に勤行怠りなく、たゞ清十郎の後生冥福を祈るのであつた。お夏ばかりでは無い。外にも云ひ交した女で同じ姿に身を淨めた者があつた。

但馬屋の主人は、一旦失つたその金を妹が庵室に納めて、
又清十郎の佛事供養を親切に營んだ。

おさん茂右衛門

春もや、深い四月の或る夕暮。河鶴の軟かな四條河原の偶
ある水茶屋に居頼れて、外に目を奪られる四人連があつた。
その頃京都中に名高い遊蕩仲間、男四天王と噂される人々で
あつた。

何れも身代の家に育つた氣儘息子。殊更異様の好み風俗に
派手を表はして、年から年中をたゞ縦まゝなる歡樂と奢侈と
に追ひ耽つて居る。昨日は島原のもろこし、花崎、かをる、
高橋に遊べば、明日は芝居茶屋に竹中吉三郎、唐松歌仙、藤
川吉三郎、光瀬左近を近づけると云ふ風に、その遊びやうも

尋常では無かつた。

然し、遊蕩も馴れては倦きては悲しい。今日は趣向を變へ
てこゝに集り、折柄花見時とて着飾れる地女の多く出たのを
幸ひ、有らば目に立つほどの美人を探がし出し、それを當座
の興として酒に荒まん計畫なのであつた。その目利き役には
物馴れた役者の誰某が先づ選ばれた。

春一日の野遊びに遊びほゝけた女の群が、暮間を惜しさう
に、まだ灯も入らぬ町をゾロ／＼通つて行く。垂れ籠めた女
中乗物も行つた。三人五人と笑つたり話したりして行くのも
ある。皆それ／＼品作りを見せて何れを何れとも云はれない
が、さて又これぞと際立つて目を引くのも無かつた。

繪心のある一人は硯紙なぞ牀几に持出して、好く見える女の委付きなぞ筆早にうつし取つた。その中に、樺色らしい軟かな絹を着た三十四五の女があつた。その樺色の左の袖から掛けて、本繪の具に繪を描かせて、薄色の絹足袋、三筋緒の雪駄の足音も軽く、スラリと伸びた委付きであつた。目が長く切れて、肩の線も軟かい。鼻は少し高いが、これとて然う苦になるほどの形ではなかつた。何かの拍子にその女が下女へ話掛けるのを見た。下齒が一枚抜けて居た。それ限りの笑ひとなつた。間も無くその後から、十五、六七とも見ゆる薄皮立ちの色白い娘が來た。耳付もしほらしく、目に利發が表はれて居た。

母親、比丘尼、下女、六尺と云ふ物々しい附人であつた。まだ縁前の娘かと思つて、鐵漿つけて、眉が無い。百羽雀を切り付けた段染の帯を高く締めた胸元が娘らしくフツクラ軟かい。好く見ると、振返つた横顔に可也の切り創があつた。生れ付いての疵とも思はれない。「さぞ、その時の抱姥を恨むだらう。」と一人がシミ／＼した調子で斯う云出したので、皆寄つての大笑ひとなつた。貧しい木綿縞の扮装した、然し美しい女が裾を風に吹かれて通つた。二十一二の娘であつた。貧しい補綴の姿にあはせて、あるに任かせて穿いた紫の皮足袋が目立つた。傍目も振らず、自分一人を頼むやうに足早やに行つた。好奇から人

をつけて後を探らせると、誓願寺通りの場末に住む煙草切りの女と知れた。

そこへ、括け紐の吉彌笠を顔自慢さうに、浅く被ついだ女が来た。

「これだく、静かにしろ。」

若い人たちは斯う喚き合ひながら、皆はその近づくのを待設けて居た。

廿七八と見える年には派手な姿であつた。三枚かさねた小袖はみな黒羽二重、裙廻しの紅うら、金のかくし紋に、織物の帯を幅取つて前に結んで居た。腰帯から下の線がいかにも軟かに伸びて、抜き足して、練るやうな歩き方であつた。

その後から續いて、三人の下女が獨りく、年子らしい三人の子を抱いて行つた。

「母ちやんく。」と小兒は括れた手頭を握つてむづかつて居る。女は知らぬ顔して済して行く。

土の香が薄く立つて、夕暮の町は匂につままれた。物の色が濡れたやうに色取り濃く透明つて見えた。

その中を、ゆたかに乗物つらせて歸り来る一群れの女連があつた。十三か四の娘が一人、主顔にその中に勝れて見えた。梳きながしの髪の毛を少し折り戻して、眞紅の紅絹をたゝんで結び、前髪を若衆のするやうに梳き分け、金元結を揃へて結んである。白縹子に墨型の肌着、上には玉蟲色のひかる

縞子に、羽をひろげた孔雀模様を切り付けにして、唐絲の網さへかけて居た。十二色のたゝみ帯。後から浮世笠持たせ、藤の花をかざし、紙緒の穿き物を穿いた素足が仄闇に際立つて白かつた。

「今日の一番。」

「これだ。」若い人たちはその姿に見惚れて、薄闇に遠くなるまでその後姿を見送るのであつた。

人を出して探がして見ると、それは室町通りの或る家の娘、今小町とて噂に高い娘であつた。

二

大經師に何がしと云ふ男があつた。物好み強いところから、未だこれと云ふ定まる妻もなく、年久しく獨身暮しであつた。男暮しを氣樂と云ふが、馴れても寂しい夕暮なぞ多かつた。

人の噂に室町の今小町と云ふを聞いて、それとなく様子を探つて見ると、二三年前、彼の四條の水茶屋に集つた四人男のうちの一人にも、その時から思ひ付けて人渡して縁談を取急いで居る者があつた。

大經師は下立賣烏丸上ル町に其頃、有名な仲人上手のあるのを折入つて頼み、その人から望みの縁を申込んだ。その人は口上手で名高かつた。吉日を擇んでおさんを迎取ることゝなつた。

睦しい日が三年過ぎた。

おさんは世話女房として、良人大事、家大事とたゞ氣を張つてまた面白さうに働いた。手づから絲を染めて紬も織つた。竈の下の薪や水落しにも小さく氣を配つて、一日の小遣帳も細かく目を離さなかつた。

その爲めばかりでもあるまいが、家業も日に／＼繁昌した。或る年、大經師は家を明けて江戸へ旅する事があつた。

女ばかり残して行く家も氣になる。おさんの里方へ行つてそれを相談すると、親々も心配して長年その店に奉公して居る茂右衛門と云ふ手代をその留守居にやる事になつた。あれならば氣心も知れて居る。萬事おさんの心だすけにもならう

と云ふ、親々の一向なる親切からであつた。

この茂右衛門は人もゆるす律義者、若い身の風俗をすて、身體を細かく働かせて長年を勤めて來た。袖口の窄い着物を着て額も野暮らしく狭く取り、唯向職業の外には氣を散らさぬ男であつた。髪置きしてこの方、編笠をかぶつた事なく、まして榮耀の腰脇差さへつくつたことが無いと云はれて居た。秋風が立つて夜々の木の葉が騒いだ。冬の寒さを今からの養生に、茂右衛門は偶と灸點を思ひ立つた。それには丁度幸ひ、在所生れの下女にりと云ふものがあつて、これが少しは艾のつまみやうを心得て居た。頼んで据ゑて貰ふことゝした。

りんの鏡臺に縞木綿の蒲團を折かけて、それに腰かけて初
 灸の熱さを律義さうにこらへる茂右衛門のしかむる顔付、そ
 れが可笑しいとて女どもはお乳母から、仲居の若い女どもま
 で周圍へ集つて笑つた。

それも初めの一つ二つで、馴れるほど火にいくらか強くな
 つた。背骨をシン／＼つたつて身肉の縮れるやうな痛さを忍
 んで鹽灸を据ゑた。

「熱いでせう。もう止しませうね。」りんは齒を喰ひしばつて
 泳へる男の顔を氣の毒さうに云つた。

「なアに、我慢します。」

「だツて、熱さうですものを。熱かつたでせう。」

おさんの聰い目は茂右衛門を思ふりんの心を直ぐ知つた。
 心持の鈍いりんには又それを秘し隠すだけの氣働きも無かつ
 た。おさんは可笑しがつて、面白がつて、それを傍から見
 居た。

田舎出のりんには字を書く手が無かつた。下男の久七が心
 覚えに記ける跡り書きが羨しく、それに切ない文言を頼んで
 見ると、却つて散々にひやかされた上に聞く氣もないことを
 耳に囁かれたりした。その間に氣の腐れる彼岸雨もすぎて、
 時雨らしい雨が瓦屋根へハラ／＼と音を降らして過ぎた。

おさんは或る日、江戸の良人へ内便の手紙を書いて居た。
 その筆ついでに自分から云出して面白づくからりんの手紙も

さら／＼と書き流した。茂のじ様まゐる。身よりと軽く書いて、引結びの手紙をりんの前へ投げ出した。

りんは唯うれしさ、都合の時を見計つて居ると、或る時見世から煙草の火を、と呼ぶ。幸ひ下男の男も居ない。その火にかこつけて手紙をソツと茂右衛門に渡した。皮肉の厚い胸を跳らせながら臺所へ戻つて来た。

書き馴れた手紙を読んだ茂右衛門は、顔の鈍さに似合はず優しい氣の女と、おりんを然う思つた。そして、手紙にひかれて筆面白い返事を書いた。そしてそれをまたおりんへ渡した。

おりんは貰つた返事を読むにも困つた。おさんの機嫌を見

て、或る時それを竊つと襦袢の袂から出して耻ぢながら読んでもらつた。

取つて読んで見ると、「思ひもよらぬお手紙、此方も若いもの、事なれば、いやでもあらず候へども、事かさなりては取上げ婆がむづかしく候。去りながら着物羽織風呂銭身だしなみの事共を其方から賃をお出しなされ候はゞ、いやながら御心にも従ひやるべし。」と、飽まで女を冗談にして、嘲けるやうな書き方であつた。

「憎いねえ、何んば何んだツて。待つてお出で、私が好いやうにしてあげるから。」斯うおさんは泣きさうな顔して居る下女を云ひ慰めて又手紙を書いてやつた。

りんとして然う捨てた容色ではなし、餘りと云へば悔り過ぎた男の爲方を、おさんは自分の事のやうに口惜しく思つたのである。いやが應でもこの女の耻を救つてやりたいと思つた。好き返事なければ幾度でもと云つたやうに、終には本氣に引入れられて度々その手紙を書いてやつた。

りんは唯オロ／＼してそれを見て居た。

一度から一度と讀む度に文面から茂右衛門の心が動いた。

始め嘲つたことを悔みながら素懐しい事も書いて渡した。又五月の十四日の影待ちにはと、固く日を決めて約束をば云ひ送つた。

おさんはその手紙を見て、女どもと一つになつて、聲のあ

る限り笑つた。すると中に居たお針の婆が云ふには、とてもこの上のなぶり事には奥様がりに代つてその寢床に居たら面白からうと云ふ。そして、おさんが叫ぶ聲に合はせて女中どもは紙燭の火を差出して男を罵り笑ひにする手筈である。

「それは面白い。好いからお前方も思ふさま云つてお遣り。」
おさんも氣輕くはいやいで、生綿の入つた下女の寢間着に姿をやつした。

おさんは固い蒲團の寒むさになやみ疲れて、明方頃の一時を快くトロ／＼と眠つて了つた。

棒、薪なぞまで用意して待つて居た女ども、宵からの騒ぎにもうおさんより前に躰を掻いて寢込んで居た。

朝おさんは覺めた。そして身體を驚いた。最う何うする事も出来なかつた。

「何うせ斯うなつたのだ。」おさんは存外に思ひ切りよくその心を決めた。

三

翌る年の櫻時、石山寺の開帳が賑うた。人は多く東山の花より、信心ながらのこの方に引付けられた。和氣が深く、けふるやうな湖水の縁を、はやりの姿して往來する女連の姿が特に多かつた。

おさんも茂右衛門を宰領に女どもを連れて參詣した。繪の

やうに春日の光る湖水に舟をうかべて、町住居の狭苦しい目を慰める心もあつた。熱田から手繰船を雇つて、鏡山、鰯の崎、堅田、志賀と一日を眺め暮して、その夜龍燈のあがる頃、白髻の宮に船を着けた。そして、その晩は緩かな水音を近く宿を見付けた。

おさんはこの春からの屈托に萎れて、その日一日鬱々して居たが、夕靄の深くこめた湖の上を遙かに眺めて松影の深い處に佇んだ時には、我知らぬ涙がその頬を傳つて流れて居た。そして、何うせ助からぬ生命、いつそこの水に身を投げて罪を淨めたいと、後に立つて居る茂右衛門へ然う云つてさゝやき口説くのであつた。茂右衛門も云ふ言葉なく悄れて居た。

「好い事が御座いますよ。」

暫くして、男は思ひ付いたやうに云つた。

「こゝで書置を書いて、二人死んだと世間へは見せて、何所でも好い、遠い國へ立退きませう。その内には又好い事が來まいものでもない。」

「けれども、然う都合好く行くかしら、考へると斯う恐ろしいやうな氣がする。」

おさんは危んで居た。

それでも家を出る時、何んの氣なく用意して來た金が五百兩、それは挾箱の底に入れてあつた。これが二人がこの先々の世を渡る金になつた。

二人は宿へ歸つて忍びくくに書置を書いた。そして、おさんはそれへ肌守の如來と、黒髪を少し添置き、茂右衛門は又人に見馴れた銅ござらへの脇差を置いた。

その他、二人の上着、女の草履、男の雪駄、その細かい所まで氣を付けて岸に投げて置いた。

それから茂右衛門は人に尋ねて、岩飛びと云ふ水くゞりの上手な漁師を雇つて來た。概略の様子を話して金を多分にやると、漁師どもは仔細なく二人の頼みに従つた。

夜が深けた。二人は金を肌結び付け、身ごしらへして、ソツと忍んで宿の笹木戸を先づ明けて置いた。そして皆々を揺り起した。思ふ次第あつて今死ぬと遠くから言殘し、飛ぶ

やうにそこを走り出た。

皆目を覺して慌て騒ぐ時には、家前の荒岩の上に念佛する二人の聲が細々と聞えた。やがて、續いて二度の水音が、静かな夜陰の空気を揺り動かして人々の耳に響いた。人々は岸へ走つた。

男はおさんを肩にかけて、その夜の中に木深い山路を走つて偶ある杉立ちの深い村まで遁げ延びた。頼まれた漁師どもは水をくぐつてそこから少し離れた岩の上に息を吹き出した。同行の人々、下女下男は泣きの涙で、翌日一日を死體の捜索に目を暮したが、これも諦めて遂には京都へ歸つた。で、秘しかくしに二人の事を世間へかくして居たが、それも破れ

て何時となく世間の大評判になつた。主従心中と讀賣にもうたはれた。

四

路を山の険しい丹波路にとつた。茂右衛門はおさんの手を取つて、引擦るやうに岩路を上つた。路に分れ、路に會ひして行くうちに、樵夫の路さへない林の中にまぐれ入つた。

おさんは夜露の中つて痙攣る横腹を抑へて、苦しさうにかがみながら歩いて來たが、到頭その路傍に躡んでしまつた。「最少しの辛抱、最少し行くとキツと里がある。」斯う云つて勵ましても、おさんは俯向いて切なげに空睡を

地に吐いて居た。

「今になつて、そんな弱い事。氣をシツカリ持つて。」

おさんを肩に掛けて又石高い路を歩き出した。

やゝ行くと村へ出た。京街道の一つとあつて、やつと馬が行違ふほどの岨路がつゞいて居た。傍にわら葺の軒に杉なぞ折かけて、諸白を賣る小店があつた。ほこりまみれの一文菓子、土人形、かぶり太鼓なぞ云ふ少しは都らしい玩具なぞ店の屋臺にならべてあつた。

二人には人の顔まで稀らしくあつた。

そこでユツクリ休んで、茶代として小判一枚を出すと茶見世の主人は不審さうにそれを掌に翫つて見て居た。京都をは

なれて僅か十五里なのに小判知らぬ村があると、二人は目を見合せて笑ひ顔れた。

馬をやとつて、栢原と云ふ宿へ入つた。そこには年久しく音信を斷つたが、茂右衛門の父の所に奉公して居た下女の家があつた。

年の上ではあり、何うかと思ひ心配しながら尋ねて見ると、幸福と未だ達者で居て、快く立ち迎へてくれた。その晩は死んだ親々の事なぞ話して明した。

次の日の明るい朝、年寄のかすんだ目は初めておさんに氣が付いた。

「何方様の御家様で。」と聞かれて茂右衛門は當惑した。口か

ら出まかせに、ツイ自分の妹と云つて了つた。

「おや、然やうで、これは些とも心付きませんで。」と年寄は急に改まつた。

「實は長く御屋敷へ奉公に上げて置きましたが、生來身體が弱いので、とても都の煩さい暮しは出來ない。物靜かな田舎へでも縁付かせて、暢氣に暮したいと思つて居ます。タンとこのことは出來ないが、持參金も百と二百は用意して置きました。」と當座の信用を得たいばかりに、要もない聞かれもしないことまで喋つて了つた。

年寄は考へ、聞いて居たが、いつしかその話に引込まれて了つた。自分にも縁頃の息子がある。丁度年も似合ひ、出

來ます縁ならばと、一つは金にも動いたらう、その様な事を云ひ出した。失敗つたと思つたが、今更ら取返しが付かなくなつた。此方がいまいに云ふほど年寄は乗り氣になつた。「お前様とも知らぬ中ではなし、その御妹子とあれば私の方も身元は知れて居て安心する。」と何所までのがさぬ口振りであつた。

おさんは片隅に小さくなつて長さうに聞いて居た。

その晩夜深けて息子と云ふが歸つて來た。髯濃く髪の毛縮んで、見上げるほど逞しい大男であつた。割織を着て、藤繩の組帯して居た。狩人が職業。名を岩飛の是太郎と云つた。母親がこの縁組を話すると、それでも悪くはなかつたと見

えて、
「うむ、俺は何うでも好いんだ。」と荒い顛髯を撫で廻して居た。

年寄は氣を急いで、今夜にも祝言させん心持、是れ彼れと肝煎るのがおさんには悲しかつた。茂右衛門も當惑して、今更言つた言葉を取返す事も出来ず、これも因果の一つと諦めて泣きながら脇差を引き寄せた。

「何うせ、近江の湖で投出した命だ。」と斯うも思ひ、又斯う云ひもした。

おさんには男より落付いた分別があつた。明日は又明日の考もある筈と、男の短氣をとめて、その晩は快く是太郎の

酒に酌した。そして、それとない世間話の風して、自分の生れ年を人の忌み憎むひのえ午と話して聞せた。

けれども是太郎はそれを聞いて恐れる男ではなかつた。

「譬へばひのえ猫でも、ひのえ狼でも俺はかまはない。」と酒に赤濁つた顔でゲタ／＼笑つて居た。

「青とかげ食つてさへ死なぬ命だ。今年二十八になるまで蟲腹一つ病んだことが無い。まア、この身體だけが俺の價値さ。」と脾弱さうに生れた茂右衛門をあざ笑つて居た。

二人はこゝにも居られなかつた。その夜の中にひそかにそこを抜け出して、奥丹波路へと志した。そこから日數をかさねて丹後路へと踏み入つた。

その間にこんな事もあつた。

切戸の文珠堂に通夜した朝であつた。茂右衛門は疲れ果てたその夜の夢にまざくと枕元に立つ神の聲を聞いた。二人の罪は所詮通れがたきを示して、一日も早く罪障消滅の道に歸依すべしと云ふのであつた。それと話す茂右衛門の曇つた顔をおさんは吹出して笑つた。

「末々は何うなつても好い、私は生きて居るうちだ。」と云ふ。

「それも然うだ。考へて見る方が、馬鹿々々しい。」
茂右衛門も明るい心になつて女と一所に笑つて居た。

五

憎い女と恨みながらも、死んだおさんは最惜しい。大經師は先づ世間並と云はれるほどの問ひ弔ひを營んだ。

忌日々々にはかゝさず旦那寺の僧を供養に呼んだ。また物好きからの派手衣裳は幡天蓋につくり直して寺へ納めた。そして、年月の夫婦なか、大經師には思ひ出の悲しい夜々が長く續いた。

茂右衛門も初めこそ世を忍び恐れて、人にも顔を見せないやうにして居たが、馴れるに従つて住馴れた京都が戀しくなつた。二人してけぶり立つ山の方を遠く眺めて、寂しさうに

溜息を洩すことも度々あつた。

おさんの顔にも馴れない雨風のやつれが日に／＼深く見えられた。

或る時、茂右衛門は穢なき装束に身をやつし、編笠を深くつゝみ、おさんは固く里人にあづけて家に忍び出た。これと云ふ用事はないが、唯何んとなく都戀しく思はれたのであつた。

態と夜を擇んで京へ入つた。丁度その日は十七日、月光は霜のやうに蒼く地に降りそゞいで居た。

急ぎ足の人通りにも胸をとゞろかして、主人の家近く寄つて様子をかゞふのに、店先には若い者ども頭をつけ集めて、

ゴト／＼と何やら穩かならぬ物振りであつた。

好く聞くに何か金の詮索らしく、一人々々の身體まで検めて居るらしい。何れは女から起つた事であつた。

それから色々の話が出た、茂右衛門の身の上にも移つた。

「然し、茂右衛門は何う云つても果報者さ。あれほどの人を取れば俺ア死んでも恨みが無い。」と一人が然う云つた。

「然うだな、一生の思ひ出つて事もあつた。うまい事しやがつたものだ。」とまた一人が合槌を打つた。

中には又、分別臭い聲して、

「俺アいやだ。風上にも置けない奴さ。大事な御主人をたぶらかして、あんな悪黨があるものか。」とさも憎々しくけなし

て云ふ者もあつた。

その聲で知れる。儘かに大文字屋の喜助である。人の哀れ嘆きも知らずに憎い奴、あれには預り手形にして銀八十目の貸があつた。あいつ憎い〜と身が沸え立つほど腹が立つた。すると又一人が進み出して斯うも云つた。

「尤も人の噂だから、つきりした事は云はれないが、私は茂右衛門二人は死なずに居ると聞いた。何んでも伊勢のあたりで隠れて居ると云ふことだ。旨い事して居やがる。」と羨ましさうな聲に聞えた。

茂右衛門は蒼くなつて、暗い檐下を顔へ出た。そして、三條邊の静かな商人旅宿へ泊つた。湯へ入りもせず。そのまゝ

寢床へもぐり込んだ。

その夜は丁度十七夜代待の通し、茂右衛門は紙に十二灯をつゝんで心私かに身の安穩をさへ祈るのであつた。

明る日は早速田舎へとも思つて覺めたが、さて又都の町には引かるゝ思ひ出も多かつた。歸つて行く丹波路には秋雲が白く低く流れて、あの中へ遠く入つて行く自分の身が悲しまれるのであつた。

四條の河原に出ると、芝居小屋に藤田狂言がかゝつて居た。「筑紫三番の初り〜。」と木戸ぶれの聲が賑かに聞えた。

自分も見たいが、見て歸つておさんにも話したかつた。遠坐借りて、場の遠いところに若し知つてる人に遇ひはすまい

かと、小さくなつて見物した。狂言は或る若者が人の娘をぬすむ筋であつた。

その幕過ぎて、何気なく見廻すと、同じならびの棧敷におさんの良人大經師が矢張り来て見て居た。その癖それまで何度その方を見たか知れないのに、ツイそれまで気が付かないで居たのだ。

茂右衛門は眞蒼に顔へながら芝居小屋を出た。穿いて居る雪駄が脱げて歩けないやうだつた。

そして、直ぐその日丹波なる自分の居村へ歸つた。それに懲りて二度と京へ出るやうなことは無かつた。

菊の節句が近付いて空が水のやうに秋澄みの日が来た。

毎年来る丹波からのなじみの栗賣が大經師の臺所へ尋ねて来た。四方山の話の序から、偶と思ひ出したやうに、

「そして、こちらの御内儀様は何うなさいました。今年はお見えになりませんかやうですが。」と聞く。

周囲の人たちは何んと云つて好いものか、挨拶に當惑して黙つて居ると、主人は傍を向いて苦い顔しながら、

「あいつにや、困つたよ。」と投出したやうに云つて居た。栗賣は不審さうな顔付して、

「さて、世間や似た人もあるものだ。こゝの奥様と微塵もちがはぬ人が丹後の切戸あたりに住んでお出なさる。一

緒に御座る男の人が又、こゝに奉公して居さしつた若い人に
 ソツクリです。」と獨言のやうに云つて聞せた。
 聞いた大經師は心に危ぶみながら、竊つと人を見にやると、
 果して世を忍びに活きるその二人であつた。直ぐ身内大勢を
 遣はして二人をその一つ家から引囚へた。京へ連れて來て訴
 状書いて上へ訴へ出る。

二人とも重罪科はのがれなかつた。九月二十三日の明方、
 栗田口の刑場に相ならんで死刑になつた。又その女中の玉と
 云ふものも、取持ちの罪に問はれて同じ處刑になつた。

おまん源五兵衛

世の流行歌にも名高い源五兵衛と云ふは、薩摩の國鹿兒島のうまれであつた。

その源五兵衛、髪を國風俗の後さがりにキリ、と結び、並すぐれて長い脇差、ことし二十六の春まで髪の高い女のたはむれ知らぬと云ふ男であつた。

一日々々に曇りの深い早春の空は、ある夜みだれて、宵からの雨となつた。

夜の深けるに連れて、細い、暖かな雨音が、茅屋根の小座

敷をしめやかに降つた。物の音がおぼろの底におどんで、その顛へ顛へる響ばかりが遠くへつたはるやうな夜であつた。

横笛の音が揺れるやうに絶えた。

振袖の少年はその湿ひのある蒼味の深い目を伏せて、ホツと長い溜息を洩すのであつた。そして、ソツと窺ふやうに肱を廻して連吹きして居る人を見上げた。

——熱した眼であつた。

横笛は又細々とつゞいた。

歌口にかるく息を吹く少年の唇は時々顛へた。

心持まるみの瘦せた兩の頬はうつすりと、悲しい紅味をいろどつた。そしてそれが、落ちる日が雲に映えまた雲に冷め

るやうに、丁子の沈んだ灯火の動くまゝに揺いで見えた。
 | 變る時なく熱した源五兵衛の眼、その節調を動かす指
 の先にもはげしい感情が波打つて居る。
 撓やかにやゝ面やつれた少年は俯向きながらも、その熱に
 燃える目が時々、引ッ擱かむやうに鋭く自分にそゝがれるの
 を知つて居た。然う云ふ時は、その鋭さが、鳥の嘴のやうに
 瘦せた心を痛ませるのであつた。
 強き指、逞しい若者らしい眩、乾いた呼吸、熱い身の熱。
 | 斯う心が移されて行く時、少年の目は恨むやうに冷た
 く冷めた。瞳にうごく嘲りもある。強き壓迫をのがれようと
 狂ひ立つ反抗の強味も見えて来る。

けれども、それはホンノ一時。灯が水をもやすやうに消え
 て行く。
 笛はまた止んだ。少年はまた悲しげな息をホツと洩した。
 若者の熱した目は、はかなげに俯向いて、肩を小さくして
 居る少年を訝かしさうに眺めて居た。
 土から湧き上がる濡つた春の暖味は、止まず絶えず降りつ
 づく細い雨に細い雨音に褪されて、木の葉の緑を冷たくする
 やうに聞える。折々、せつなげに身振ひする木の葉のそよぎ
 も外の闇から聞える。
 少年は夢を見るやうに、うつとりその静けさを聞いて居た。
 悲しげな顔がさびしく曇つた。力ない咳嗽の聲さへ交つた。

「あゝ、こんな夜も今夜限り。」と少年は獨言のやうに云つた。そしてさびしい雨音に耳を取られて居る。

若者の耳にはその言葉が聞えないやうに見えた。その聲の響ばかりに美しくしさを聞いた。

肩からかけて伸びた肱のかゝりが、女のやうに軟かな線を取つて居るその姿に酔つて居るやうにもあつた。

「何か話ませう。もう、私どもの間も今晚かぎりですもの。」

十六の少年は寂しい笑をうつむけながら云つた。

「今夜かぎり？ 何が？ 私は何時まで斯う見て居たい。」

若者もつりこまれる笑を固い唇にもらして居た。

「いゝえ、私は……。」

「そんな悲しいことは聞かない。詰らぬことを云ふ人。」

「いゝえ、人の生命は明日とも知れないもの。私は……。」

少年は頷れるやうに色の白ふ振袖の上につぶして泣いた。

外の雨は細々と闇を降つて居る。そして、その音が遠くへ

遠くへ遁げて行く。

中村八十郎と云つて、少年は明日々々元服の今年十六にな

つた。

若者はそゝり上げられる、何とも云はれぬ頼りなさ悲し

さを心に感じた。

暗い心を黙つて見て居る。

そして、少年はその夜の明方も待たず美しく死んだ。
少年の死骸はその時の姿のまま大瓶に入れて、蒼々と崩出
でる若草の野邊にうづめられた。

源五兵衛はその塚に伏し倒れて、唯泣きに泣かれるだけ泣
いた。思ひ極めて、いよいよ自害と心を決めたが、またその
間には考へる所もあつた。

これから三年の間はこの少年の後世を弔ひ、月日もあたる
今月の今日には、必らずこゝに歸り来て命を終らんと心を決
めて、その野墓の坐を去らず髪をきつた。そして、その場か
ら西園寺と云ふ寺に駈入つて、その長老の佛弟子となつた。
野は夏花にいろどられた。そして、長い夏の逝くとともに

濃い色の夏花が裏枯れた。

秋風が木の葉にさゝやいて、朝顔の花は日にく小さく、
錢ほどの花が高く澄んだ秋空の朝々を咲いた。その瑠璃色の
花の朝咲いて、色のまゝ萎れるのを見て、いろくの事が思
出された。

盆の十四日

亡き人の魂が来ると云ふ宵方、源五兵衛は縁側へ出て空を
流れる白い雲を見て居た。雲は流れくして止むことなく遠く
遠くへ流れて行つた。

うすい杉の葉の匂ひが何所ともなく煙をはつて来る。そこ
この門前には苧がらをたく迎へ火が細々と煙り立ち、燃え

立つた。その火につれて盆踊りの太鼓がしめやかな夏の夕暮の空気を揺り動かして傳はつて来た。身に泌むやうな夏の匂、夏の響を凝と聞き締めて居る源五兵衛の寢れた頬に涙が傳つた。

その日、その場合から發心して、源五兵衛の若い法師は遠い旅へと志した。紀州の熊野を志したのである。

二

冬は近かつた。家々は冬構にいそがしく、窓をふたぎ、柴をたゝんで雪垣なぞ作つて居る。村を少しはなれて聞くと、衣うつ砧の音が夕暮の空に響い

た。或る村の野はづれの雑木林を行くと、野面を迷つて来る夕靄の中に空を見上げて、小鳥をねらつて居る少年があつた。十五か六、十七とはなるまい。水色の袴帷子に紫の中幅帯、金々具の一つ脇差を差して、女のやうに線軟かく目の美しい少年であつた。仰向いた顔が烟立つた夕闇に白かつた。

さし竿の中ほどを取つて、しきりにねらつて居るのだが、小鳥一つあたらなかつた。少年は口惜しさうに舌打ちして、終ひには悲しさうな顔になつた。

その眉をひそめる形なぞ、死んだ八十郎にソックリであつた。源五兵衛は日の暮れるのも忘れてその少年の後姿をシダ

シゲと眺めて居た。

「どれ、私が取つて上げやう。斯う竿を持たなくつては。」と源五兵衛はわれから云ひ寄つて少年の竹竿をかりた。

法師は諸肌拔ぎになつて鳥を射した。ねらつた鳥は一つも外さず、見る中に得物は手にも餘るほどにあつた。

「お坊様は何所の方。」と少年はもう馴染んで斯う聞く。

「私は些と遠い國の者です。」

「遠いと申しまして。」

「薩摩の國、この國の西の端で御座います。」

尙もいろ／＼と問ひほられるまゝに、源五兵衛はその出家するまでの理由を細々と話して聞せた。語る言葉に自然節

が付いて、涙はその目焦けのした頬を傳つてハラ／＼と流れ落ちた。

少年も何時となしその殊勝さに動かされて、深い、黒味のある瞳に涙を一杯ふくませて、悲しさうに聞いて居る。

「その八十郎と云ふ方はお幾つで死になすつた。」

「丁度お前様と同じ位の年頃でございました。」

「御氣の毒な。又然して御修業なさるお前様も御氣の毒な。」

優しい心の少年は心から氣の毒さうに源五兵衛を見上げて居た。

「難有う御座います。その御優しい御心を聞いたならば、さぞ死んだ者も悦びます事せう。」

日に雨に萎れ切つた法師の姿は、見るからに感傷しやうい少年の心を傷めた。

遠い國、芭蕉の實ると話に聞いて居るその國に、夢の花のやうに咲いて又夢の花のやうに美しく散つた人のことが、悲しく少年の心を顫はせた。そして、ツイ思ひ極めて、
「兎に角、今夜は私のところへお泊りなされ。又種々の變つた、珍らしいお話をもうかゞひませう。」と思ひ入つて斯う云ふ。

源五兵衛は強ひられるまゝにいなみもせず、馴々しくも先に立つ、その少年の家へ導かれた。

家は木下の關深い森の中にあつた。馬屋に馬の嘶きも聞え

る。武具など嚴しく飾り立てつゝ、いはれあるらしい家作りであつた。庭には熊笹しげりて、いかにも奥深さうに取つてあつた。

「こゝが私の部屋。」

斯う云つて案内されたのは、二階座敷の部屋であつた。書物棚などもしほらしく飾り立てゝあつた。

召使の者どもが交るゝ挨拶に出て来た。

「この方は私の御師匠様。氣を付けて親切にして上げてくれ。」と少年は一々に法師を引合はせるのであつた。

その夜は一夜を話し暮して、美しく夜を明した。

夜が明けると法師は別れを惜しみながらその家を出發した。

「では、お下向をお待ちします。」

「必らず上ります、お待ち下さい。」と斯うかたく約束して、源五兵衛はそこを出離れた。少年は門前に立つて遠くなるまでその後姿を見送つて居た。

少しはなれて村人に聞くと、その家はところの代官役にて、なにがしと云ふ人、少年はその愛子であつた。

若者は唯その少年を忘れかねた。それに就けても、死んだ八十郎のことが染々と思ひ出される。めざす佛の戒を恐れぬとではなけれど、又思ひ出すほど少年の優しき情に心が亂される。

やうく道を辿つて弘法のお山へ詣り付いた。そして、そ

の晩は南谷の宿坊へやどつた。一日参籠したゞけ、奥の院へも詣らず、そこから直ぐ下向路にかゝり、日數をかさねて彼の國へもどり着いた。

村を入つて、遠くその門構が見える所まで來ると、門前の大樺の下にシヨンポリ立つて居る小さな影が見えた。見まがふ筈もない、彼の少年であつた。ニツコリ笑うて迎ふるその齒なみが白くならんで見えた。

源五兵衛悦んで笑ひ寄ると、その姿が見えなくなつた。そここゝ探し求めて居るうちに家の人々もあやしまれた。

若者は問はれるまゝに自分出家のいはれから今度の次第を細々とその少年の父と云ふ人に話した。

その父の話に聞けば、少年はこの二十日前に死んだ。父はまたその臨終の時のことなど憶出して、

「いや、それに就いて思當る事があります。もう今に目を瞑ると云ふ時でした。悴が宙に手をもがいて、お坊様／＼と切りと申します。不思議な事を云ふ。熱にうかされての囈言とばかり思つて聞いて居ましたが、それではお前様のことであつた。然うでしたか。」と溜息を吐いて歎き悲しんで居た。

源五兵衛の心に閃くのは唯自分の死であつた。この坐を去らず、直ちにとは思つたものゝ、さて、死なれないのは人の生命であつた。急立つ心が鎮まると共に、誰に止められるともなく死ぬのを思ひ切つた。たゞ斯う思ふ考のみが彼の不甲

斐なさをせめるのであつた。

源五兵衛はシミ／＼と自分を小さく思つた。

三

源五兵衛はその後、片山里に庵室をいとなみ、早く死したる美しき人々の爲め念佛三昧にありがたき日を送つて居た。知る人も知らぬ人も、その志のまことに動かされぬはなかつた。

その頃、同じ城下の濱の町と云ふ所に琉球屋何某の娘におまんと云ふがあつた。年は十六。心持やさしいなかに何所か思ひ詰めたるところあつて、近傍に美人として有名い娘であ

つた。

おまん何時からとも無く源五兵衛を思ひ慕つて居た。思ひを寄せる手紙を度々書いた。

たゞ一筋に弱し、穢なしと女性をいやしむ源五兵衛はその手紙を見るさへ耻のやうに思つて居た。

無論、返事なぞ書く筈はない。そのまゝに過ぎた。

十六と云ふ娘の年頃、そここゝから傳手を求めて、似合ひ不似合ひともに、縁を云ひ寄る者も多かつた。

おまんはそんな話、聞くさへ悲しかつた。終には虚病なぞかまひ、人のいやがることなぞ云ひ出しては亂人らしく自分を他へ見せたりした。親々も持てあまして、たゞ娘の云ふが

まゝに任せる外は無かつた。

おまんは餘程経つまで源五兵衛の發心を知らなかつた。或る人に聞いて初めて驚いた。そして恨んだ。けれども、思ひ詰めることの深いおまんは、この心何時かは遂げずに置かぬと思つた。

恨みにも恨めしい。斯う思つて唇を噛みしめた。

女にも才覚はあつた。女性を忌み嫌ふ若者を引付ける方法を知らない事はない。自分から剃刀をあて、中剃を落し、かねて用意の衣類に、誰が見ても若衆と姿をかへた。

そして、聞き及んだかの庵室へと忍び入つた。

十一月、もう山路には霜が深かつた。庵村はその山村から

も離れた、もの寂しい杉村の中にあつた。
 庵室の後には見あげる程の岩組、その前に深い谿谷の流れが
 瀬音を雨と降らして流れて居た。おまんはワナ／＼と胴まで
 顫へながら、又すくみながらそこに渡した獨木橋を渡つた。
 平地をたよりに小さな家があつた。片庇をふき下して、霜
 に色付きかけた蔓草がその上一面に這つて居る。そして、そ
 の葉に凝つた山気がタチリ／＼と地に滴り落ちて居る。
 そつと覗いて見たが、人の氣勢もない。南の方は少しばかり
 の明り窓をあけて、山の背をすべつて來る落日のさびしき
 光がホツと家の中を射し付けて居た。爐には灰が冷えて居た。
 おまんは悲しくなつた。見臺に讀かけてある本をのぞくと、

上に待宵の諸袖と書いてあつた。
 日が暮れた。山をつゝむ空気が急に冷たくなつた。
 もはや、夜半と思ふ頃、こちらへ來る松火の火がチロリチ
 ロリと野道に見えた。おまんはかくれて覗いて居た。
 走り寄らうとして氣が付くと、その右と左にやつれ顔なる
 二人の少年、同じ頃なるが同じやうな振袖を着たるが、霧が
 すみのやうに付いて居る。一人は恨むやうに、一人は歎くや
 うに見える。
 その中に挟まれて源五兵衛は白痴のやうに兩方に氣を取ら
 れて居た。
 おまん足音を立てゝ走り出ると、若衆の姿は谷風に河霧の

沈むやうに消えて見えなかつた。

源五兵衛は不審さうに少年姿の人を見て居た。夢の覺め切らない人のやうにもあつた。

「お身さまは。」と庵の前に目を見張つて居た。

「私は鹿兒島から、やはり所の者で御座いまする。」
「そして。」

「かねて御法師のことをうかゞひまして、……それで。」
と若者の目をさけて、おまんは苦しさうに俯向いて居た。

「それは、然し。」

「お弟子になされて下さいまし、私もとよりその心で。」
「なにから、して又、そんな心におなりなされた。」

「八十郎さまのことも何も私は好く存じて居ります。優しい
お心入りと聞きました、何となく悲しく悲しくなりました。」
源五兵衛は杖を地に立てたまゝやましげに咳嗽してホロボ
ロと涙をこぼして居た。

「それでは、この荒法師のかくれ家もお厭ひはなく。」

「はい。」

「眞實。」

「御用とあらば何事でもつとめまする、何うか。」

「必らずその心ならば、お見すて下さるな、實はかく申すも
のゝ私もさびしい身の上。」と熱して來る。黒衣を纏ふ法師の
若い血が躍り立つて見える。

「これが女人ならば格別、法師堂でも少人ならば佛の手前も一向さしつかへあるまい。」と斯う云つて居た。

おまんは擦られるほど可笑しかつた。自分ながらソツと太腿のあたりをつめつて痛さを試み居た。

「その代り、私にもお願ひが御座いまする。お聞き下されまするか。」

「何事でも。」

「必らず？」

「必らずで御座いまする。」法師は何所までも眞顔であつた。

「ならば、還俗なさるか。」

「お易い事。何時からとても差支へはありませぬ。」

「必らずで御座います。後はいやと仰せられても聞きませぬ。」
「それならば大丈夫、今日からでも。」と最う舊い事は總て忘れて居た。

四

頭髮などは一年かゝれば以前のやうに生える。また俗姓の源五兵衛に歸つて、暫くはその山影に暮したが、鹿兒島の片かげに昔の馴染あるのを探して小さな家なぞ借り受け、そこへ移り住んだ。

けれども又、生れた土地、父母の家が何彼につけて戀しい。夢にも時々は見るので、ある日姿をかへてその邊を忍び探す

と、見馴れた兩替屋の看板は無くて、その代りに味噌醤油なぞ云ふ札が下つて居た。

「もし、この邊に源五衛門と云ふ方は御座りませぬか。御存じならば、何うかお教へ下さいまし。」

源五兵衛は煙草なぞ小賣する小店の前に立つて斯う聞いた。「源五さんとは、前方こゝで兩替屋をなされた方ではありませぬか。」

「然やうで御座います。」

「それならば貴方、もうこゝには居られませぬ。その息子に源五兵衛とか云ふ遊蕩者がありましてな、始めは眞體な若者でしたが、凡そ千貫目と云ふ身代をスツカリ無くして了ひ、

今では乞食坊主になつて身過ぎして居ると云ふ噂で御座います。まことに飛んだ奴で、何所に何うウロついて居るか、ならばその顔を一目でも見てやりたいと思つて居ます。」と云ふ。

源五兵衛は耐らなくなつて遣げるやうに編笠を傾けてそこの前を出た。

家に歸ると、おまんはまだ灯も點さぬ小屋の中に寂しい顔して夫の歸りを寂しさうに待つて居た。

「お歸りなさい。」と云うても、別に今日出て行つた良人の便りを聞く氣も無い。疲れたやうに坐つて、壁際にもたれかゝりて、ボンヤリ良人の顔を見て居た。

二人には話の無い夜が多かつた。

次の日は三月の節句、村方は雛祭りに賑ひ立ち、家々は飾りもの、祝ひ酒にさかり立つけれど、二人の家ばかりはヒツソリと沈んで人の音もない。

「斯うしては居られませぬ。」

「斯うしては居られぬ。」

二人して始終斯う云ひながらも、さて、二人とも自ら口を養ふほどの才覚はなかつた。話出して沈むのみであつた。

その時、偶とおまんの胸に思ひ浮んだことがあつた。あれならば出来ぬこともあるまいと思はれる。それは二人とも小兒の時から榮耀に見なれた芝居ごとである。

俄に二人とも顔をつくり、鎌髯書いて村の賑ひに出た。

源五兵衛は髯の戀ひ奴。都は嵐三左衛門のもの真似。おまんは又晒し布の手踊り狂言に村の小兒どもの目をよろこばせた。

されども、もとより年を掛けて仕込んだ藝事ではない。

「やつこの〜。」

と、斯う歌つたが浮き腰が据らぬ。フラ〜と浮いて人々の手拍子の笑ひ種ともなつた。

「源五兵衛、何所へ行く。」

「さつまの山へ。」

鞆が三文下緒が二文、

「中の檜の木が……。」
と斯う云ふ事に村の人を喜ばせ、纒かの錢にその日々と活きて行く。

その疲れと、心勞は日にくおまんを萎らせた。俯向いた唇に血が乾いて、トホンとして力なく日を暮す日が多かつた。その中、偶とした便りから、この二人の事がおまんの親々に聞えた。

或る日、その手代どもは駕籠をつらせて二人の小屋を探ねて來た。貧にやつれた二人は遁げかくれるほどの氣力も無つた。

オメくとしてその家へ歸つた。

「それほど苦勞した二人。その上の苦勞させることはない。」
斯う云ふのは親の慈悲。親々は直ちに隠居して二人へ身代を譲つた。

身代はもとより人にも知られた大身上。土藏の數も指にあまるほどある。家、錢、地面も券面に書きぬほどあつた。

然し、それほど身代もらつても、源五兵衛はさほど嬉しい自分を味ふ事が出来なかつた。むしろ悲しい。何となく身に空虚を感じた。

溜息して暮す日が多かつた。